

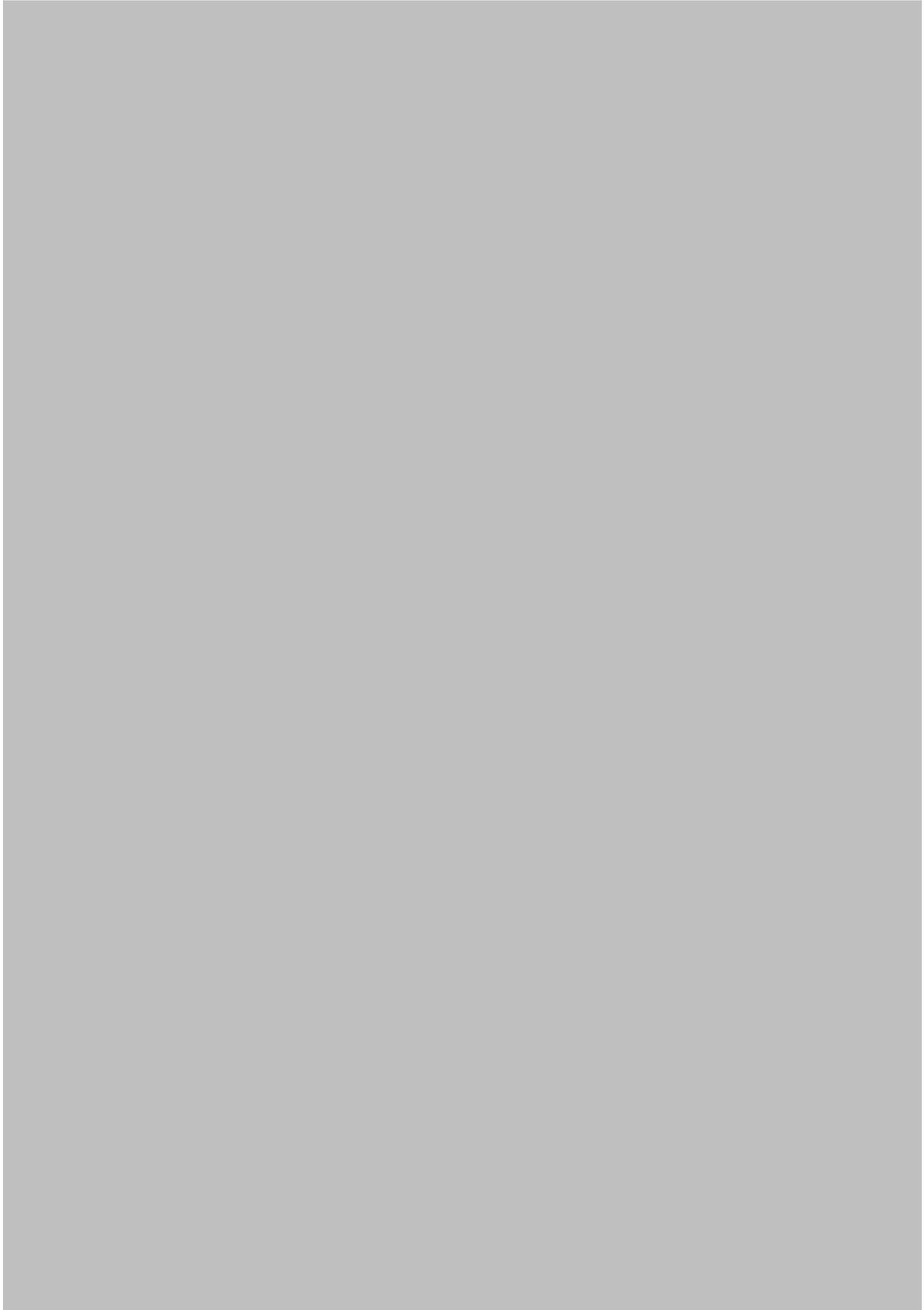
まんのう町内遺跡発掘調査報告書 第5集

満濃池総合調査報告書



2008年3月

まんのう町教育委員会



A) 満濃池水掛村々之図（明治3年）（香川県歴史博物館蔵）

表紙写真 満濃池と丸亀平野（南東より）



A) 満濃池御普請所絵図（江戸後期）（個人蔵、香川県歴史博物館提供）

序 文

まんのう町は、香川県の南西部に位置し、讃岐山脈の山並みを背景にした水と自然に囲まれた町です。町名の由来となっている日本一のため池「満濃池」は、讃岐の水がめと言われており、古来より多くの恵みをもたらしてきました。

満濃池の周辺には、数多くの貴重な文化財や豊かな自然があることが以前より注目されてきました。そこで平成19年度にまんのう町教育委員会が考古学・文献史学・植物学にわたる総合調査を実施し、満濃池総合調査報告書を発行する運びとなりました。

満濃池周囲の分布調査においては42箇所で弥生時代～中世の遺物を採集しました。神野1～3号箱式石棺の調査においては須恵器短頸壺や鉄製刀子等が出土しました。神野古墳の調査においては横穴石室の基礎の石を確認しました。神野1号窯跡の調査においては須恵器を焼いた登り窯の燃焼部と焼成部を確認しました。

最後になりましたが、調査から報告書の作成に際して、各方面より多大なるご協力とご指導を頂きました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、地域のシンボルである満濃池の文化財保護について引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成20年3月

まんのう町教育委員会

教育長 尾 鼻 勝 吉

例 言

1. 本書は、まんのう町教育委員会が実施した満濃池総合調査の報告書である。
2. 今回の調査は、香川県仲多度郡まんのう町^{かんの}神野、^{よしの}吉野、^{しちか}七箇に所在する満濃池を対象とした。
3. 発掘調査から報告書作成にかけてはまんのう町教育委員会が行った。
4. 本書の実測図の縮尺はすべてスケールで表示した。また図中の方位・座標は国土地理院第Ⅳ系（世界測地系）による。標高はT. P.（東京湾平均海面）からのプラス値である。座標、標高の記載はすべてm単位である。
5. 出土遺物・写真・図面等の調査成果物はまんのう町教育委員会にて保管している。
6. 挿図の一部に国土地理院発行5万分の1地形図を複製したまんのう町全図（承認番号平17四複第86号）を一部改変して使用した。また、株式会社大林組が発行した『季刊大林No.40「満濃池」』の挿図を一部改変して使用した。
7. 調査の実施から本書の執筆に至るまでは、以下の方々や諸機関のご指導・ご協力を頂きました。記してお礼申し上げます。

片桐孝浩、川波伊知郎、久米 修、近藤武司、高木敬子、谷口 梢、近兼和雄、長井博志、中村茂央、中山尚子、奈良一美、信里芳紀、平井佑典、古川光子、御厨義道、矢原國見、吉澤加代子、

香川県環境森林部みどり整備課、香川県歴史博物館、香川県埋蔵文化財センター、小豆総合事務所森林整備室、満濃池土地改良区、まんのう町文化財保護協会

（敬称略・五十音順）

目 次

第1章 満濃池周辺の立地と環境	(1)
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第2章 満濃池内調査の概要	(5)
第1節 調査の経緯・経過	
第2節 満濃池の地理的環境	
第3節 満濃池内の踏査結果	
第3章 神野古墳、神野1～3号箱式石棺	(14)
第1節 はじめに	
第2節 調査の経緯・経過	
第3節 地理的環境	
第4節 神野古墳	
(1) はじめに (2) 遺構について (3) 遺物について	
第5節 神野1号箱式石棺	
(1) はじめに (2) 遺構について (3) 遺物について (4) まとめ	
第6節 神野2号箱式石棺	
(1) はじめに (2) 遺構について (3) 遺物について	
第7節 神野3号箱式石棺	
(1) はじめに (2) 遺構について (3) 遺物について	
第8節 まとめ	
第9節 周辺表採遺物	
第4章 神野1号窯跡	(27)
第1節 はじめに	
第2節 調査の経緯・経過	
第3節 立地と歴史的環境	
第4節 遺構について	
第5節 遺物について	
第6節 まとめ	
(1) 立地について (2) 構造について (3) 時期について	
(4) 満濃池との関係について	
第5章 弥生時代～古代の満濃池	(41)
第6章 満濃池の歴史	(42)
第1節 はじめに	
第2節 古代・中世の満濃池	
第3節 近世の満濃池	
第4節 近代の満濃池	
第5節 現代の満濃池	
第6節 現在とこれからの満濃池	
第7章 樹木調査	(79)
第1節 調査の目的	
第2節 調査方法	
第3節 採取結果	

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	第17図	神野1～3号箱式石棺周辺採集遺物実測図
第2図	満濃池内遺物採集位置図 満濃池内遺跡位置図	第18図	神野1号窯跡地形測量図
第3図	満濃池内採集遺物実測図(1)	第19図	神野1号窯跡床～側壁断面図
第4図	満濃池内採集遺物実測図(2)	第20図	神野1号窯跡周辺断面図
第5図	満濃池内採集遺物実測図(3)	第21図	神野1号窯跡断面図、完掘状況平面図
第6図	岡の塚穴古墳採集遺物実測図	第22図	神野1号窯跡焼土・炭化物検出状況平面図、 床面受熱状況平面図
第7図	神野古墳、神野1～3号箱式石棺周辺地形測量図	第23図	神野1号窯跡出土遺物実測図
第8図	神野古墳平・立面図	第24図	満濃池の堤の平面図と断面図(『季刊大林No.40 特 集満濃池』より)
第9図	神野古墳周辺採集遺物実測図	第25図	満濃池幹線・受益地域平面図(S=1/10万) (『満濃池史』より作成)
第10図	神野1号箱式石棺検出状況平・断面図	第26図	満濃池木製樋管構造模式図(『讃岐のため池誌』 より)
第11図	神野1号箱式石棺平・立面図	第27図	満濃池境界石位置図
第12図	神野1号箱式石棺墓壇完掘状況平面図	第28図	満濃池の水位の変遷(『新修満濃町誌』より)
第13図	神野1号箱式石棺出土遺物実測図	第29図	採集地・土地利用規制図(S=1/5万)
第14図	神野2号箱式石棺検出状況平・断面図、 石材検出状況図、土壇完掘状況平面図		
第15図	神野2号箱式石棺出土遺物実測図		
第16図	神野3号箱式石棺検出状況平面図		

表 目 次

第1表	遺跡一覧表	第6表	満濃池築造の行程表 (『季刊大林No.40 特集満濃池』より)
第2表	満濃池内採集遺物一覧表(1)	第7表	満濃池水懸りの村高一覧表
第3表	満濃池内採集遺物一覧表(2)	第8表	満濃池普請記録一覧表(『讃岐のため池誌』より)
第4表	神野窯跡杭座標一覧表	第9表	満濃池境界石一覧表
第5表	満濃池変遷表	第10表	葉採集結果一覧表

絵 図 目 次

絵図1	満濃池宮築図(寛永年間) (個人蔵、香川県歴史博物館提供)	絵図9	讃岐国那珂郡満濃池堅樋長式拾式間半御仕替御普 請絵図(寛政11年) (個人蔵、香川県歴史博物館提供)
絵図2	讃州那珂郡分間画図(江戸中期) (個人蔵、香川県歴史博物館提供)	絵図10	満濃池絵図(寛政10年) (個人蔵、香川県歴史博物館提供)
絵図3	満濃池水掛村々之図(明治3年) (香川県歴史博物館蔵)	絵図11	満濃池絵図(天保8年) (個人蔵、香川県歴史博物館提供)
絵図4	満濃池樋門修築普請絵図(宝暦13年) (個人蔵、香川県歴史博物館提供)	絵図12	満濃池御普請所之図(嘉永年間) (香川県歴史博物館蔵)
絵図5	讃岐国那珂郡七ヶ村字満濃池底樋堅樋櫓図 (文政2年)(個人蔵、香川県歴史博物館提供)	絵図13	讃岐国那珂郡満濃池近郷御料私領絵図(嘉永7年) (個人蔵、香川県歴史博物館提供)
絵図6	讃州満濃池底樋掘割之図(文政3年) (個人蔵、香川県歴史博物館提供)	絵図14	満濃池堅樋底樋五十一歩之図(明治元年) (個人蔵、香川県歴史博物館提供)
絵図7	底樋伏替樋堅樋組立之図(文政4年) (個人蔵、香川県歴史博物館提供)		
絵図8	満濃池御普請所絵図(江戸後期)		

写 真 目 次

写真1	弘法大師像(2007年12月24日撮影)	写真12	倒された赤レンガ配水塔 (昭和30年11月15日撮影) (満濃池土地改良区蔵)
写真2	護摩壇岩(2007年12月24日撮影)	写真13	工事中の新取水塔(満濃池土地改良区蔵)
写真3	神野寺(2007年12月24日撮影)	写真14	現在の取水塔(2008年1月2日撮影)
写真4	闇木(2008年1月6日かりん会館にて撮影)	写真15	現在の取水塔機械室内部(2007年12月24日撮影)
写真5	境界石写真一覧	写真16	水没前の五毛岡地区(昭和13年撮影)(個人蔵)
写真6	石樋(2007年12月24日かりん会館前にて撮影)	写真17	五毛の渡し船(昭和25年撮影)(個人蔵)
写真7	赤レンガ配水塔工事とそれに携わる人々 (満濃池土地改良区蔵)	写真18	五毛の稲を干す萱葺きの民家 (昭和30年10月撮影)(満濃池土地改良区蔵)
写真8	赤レンガ配水塔(満濃池土地改良区蔵)	写真19	現在の余水吐(2007年12月24日撮影)
写真9	赤レンガ配水塔の最上部機械室内 (満濃池土地改良区蔵)	写真20	大正3年以前の初ゆる抜き(満濃池土地改良区蔵)
写真10	第二次嵩上げ後の配水塔(満濃池土地改良区蔵)	写真21	現在のゆる抜きの風景(2002年6月13日撮影)
写真11	満濃池本堤(昭和26年11月29日撮影) (満濃池土地改良区蔵)	写真22	神野寺(2007年12月24日撮影)
		写真23	樋門(2007年10月14日撮影)

写真図版目次

図版1. A) 満濃池水掛村々之図(明治3年)(香川県歴史博物館蔵)

図版2. A) 満濃池御普請所絵図(江戸後期)(個人蔵、香川県歴史博物館提供)

図版3. 満濃池遺物採集地点

- | | | |
|----------|-------------|----------|
| A) ⑩～⑭地点 | D) ⑳～㉓地点 | G) ㉗・㉘地点 |
| B) ⑮～⑲地点 | E) 岡の塚穴古墳遠景 | H) ㉙・㉚地点 |
| C) ㉛地点 | F) 岡の塚穴古墳近景 | |

満濃池採集遺物写真

図版4. A) ①地点採集遺物 C) ③地点採集遺物 E) ⑤地点採集遺物 G) ⑦地点採集遺物
B) ②地点採集遺物 D) ④地点採集遺物 F) ⑥地点採集遺物 H) ⑧地点採集遺物

図版5. A) ⑨地点採集遺物 C) ⑪地点採集遺物 E) ⑬地点採集遺物 G) ⑮地点採集遺物
B) ⑩地点採集遺物 D) ⑫地点採集遺物 F) ⑭地点採集遺物 H) ⑯地点採集遺物

図版6. A) ⑰地点採集遺物 C) ⑱地点採集遺物 E) ㉑地点採集遺物 G) ㉒地点採集遺物
B) ⑲地点採集遺物 D) ㉓地点採集遺物 F) ㉔地点採集遺物 H) ㉕地点採集遺物

図版7. A) ㉖地点採集遺物 C) ㉘地点採集遺物 E) ㉚地点採集遺物 G) ㉜地点採集遺物
B) ㉙地点採集遺物 D) ㉛地点採集遺物 F) ㉝地点採集遺物 H) ㉞地点採集遺物

図版8. A) ㉟地点採集遺物 C) ㉛地点採集遺物 E) ㉝地点採集遺物 G) ㉟地点採集遺物
B) ㉜地点採集遺物 D) ㉞地点採集遺物 F) ㉟地点採集遺物 H) ㉜地点採集遺物

図版9. A) ㊱地点採集遺物 C) ㊲地点採集遺物
B) ㊳地点採集遺物 D) 岡の塚穴古墳採集遺物

図版10. 神野古墳

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| A) 奥壁～側壁部石材検出状況(北東より) | D) 奥壁～側壁部石材検出状況(南東より) |
| B) 調査地点遠景(北西より) | E) 奥壁～側壁部石材検出状況(北より) |
| C) 奥壁～側壁部石材検出状況(東より) | |

神野1号箱式石棺

図版11. A) 調査地点遠景(南東より) E) 石棺埋土断面(南より)
B) 調査着手前状況(北西より) F) 石棺埋土断面(南西より)
C) 調査着手前状況(南西より) G) 須恵器短頸壺出土状況(南より)
D) 調査着手前状況(北東より) H) 鉄製刀子出土状況(南より)

図版12. A) 一次床面検出状況(南東より) C) 一次床面検出状況(北東より)
B) 一次床面検出状況(北西より)

図版13. A) 二次床面検出状況(南東より) C) 二次床面検出状況(北東より)
B) 二次床面検出状況(北西より)

図版14. A) 石材検出状況(南より) C) 石材検出状況(北東より)
B) 石材検出状況(南東より) D) 石材検出状況(南より)

図版15. A) 石棺床面断面(南東より) E) 墓壇掘り方断面(南西より)
B) 石棺床面断面(北西より) F) 墓壇掘り方断面(南西より)
C) 石棺床面断面(北東より) G) 墓壇掘り方断面(南東より)
D) 石棺床面断面(南西より) H) 墓壇完掘状況(北東より)

図版16. 神野2号箱式石棺

- | | |
|------------------|------------------|
| A) 調査着手前状況(北西より) | E) 土壇断面(北東より) |
| B) 調査着手前状況(南西より) | F) 土壇断面(南より) |
| C) 土壇検出状況(北西より) | G) 土壇断面(南東より) |
| D) 土壇検出状況(南西より) | H) 土壇掘り方断面(南東より) |

- 図版 17. 神野 2 号箱式石棺
 A) 土壌完掘状況 (南より) B) 土壌完掘状況 (南東より)
 神野 3 号箱式石棺
 C) 調査着手前状況 (南東より) G) 手前: 2 号石棺 奥: 3 号石棺 (東より)
 D) 調査着手前状況 (南西より) E) 土壌検出状況 (南東より)
 F) 土壌検出状況 (南西より)

- 図版 18. 神野 1 号箱式石棺出土遺物
 A) 須恵器壺 (遺物番号 71) G) 鉄鎌 (遺物番号 74)
 B) 須恵器壺 (遺物番号 71) E) 鉄製刀子 (遺物番号 73)
 C) 須恵器短頸壺 (遺物番号 72) H) 鉄鎌 (遺物番号 74)
 D) 須恵器短頸壺 (遺物番号 72) F) 鉄製刀子 (遺物番号 73)

- 図版 19. 箱式石棺出土鉄器 X 線透過写真
 A) 鉄製刀子 (遺物番号 73) B) 鉄鎌 (遺物番号 74)

神野 1 号窯跡

- 図版 20. A) 調査地点遠景 (西より) E) 調査着手前状況 (南より)
 B) 調査着手前状況 (西より) F) 調査着手前状況 (南より)
 C) 調査着手前状況 (東より) G) 満濃池浸食部分精査状況 (南より)
 D) 調査着手前状況 (北より) H) 満濃池浸食部分精査状況 (南より)

- 図版 21. A) 焼土検出状況 (右が北) D) 焼土検出状況 (南東より)
 B) 焼土検出状況 (東より) E) 焼土検出状況 (南より)
 C) 焼土検出状況 (西より)

- 図版 22. A) 縦断トレンチ西壁断面 (北より) D) 縦断土層西壁断面 (西より)
 B) 縦断トレンチ西壁断面 (南より) E) 縦断土層西壁断面 (西より)
 C) 縦断トレンチ溝部分 (南西より) F) 縦断土層西壁断面 (西より)

- 図版 23. A) 横断土層南壁断面 (南より) D) 山側壁面精査状況 (南より)
 B) 横断土層南壁断面 (南より) E) 横断トレンチ南壁 (西より)
 C) 横断土層南壁断面 (南より)

- 図版 24. A) 遺物出土状況・溝検出状況 (南東より) C) 遺物出土状況 (南より)
 B) 遺物出土状況・溝検出状況 (下が北) D) 溝完掘状況 (東より)

- 図版 25. A) 側壁検出状況 (西より) D) 側壁立ち上がり断面 (北より)
 B) 燃焼部検出状況 (下が北) E) 床面検出状況 (南東より)
 C) 側壁立ち上がり (南西より)

神野 1 号窯跡出土遺物

- 図版 26. A) 床面直上出土遺物 (外面) B) 床面直上出土遺物 (内面)

- 図版 27. A) 7・8・12 層出土遺物、採集遺物 (外面)
 B) 7・8・12 層出土遺物、採集遺物 (内面)

- 図版 28. 1) スギ 葉 3) ヒノキ 葉 5) アカマツ? 葉と球果 7) イロハモミジ 葉
 2) スギ 樹皮 4) ヒノキ 樹皮 6) アカマツ? 樹皮 8) イロハモミジ 樹皮

- 図版 29. 9) オオモミジ系の園芸種 全体 12) ダンコウバイ 葉 15) シロダモ 樹皮
 10) オオモミジ系の園芸種 樹皮 13) シロモジ 葉 16) アオツツラフジ 葉
 11) ヤマウルシ 葉 14) シロモジ 樹皮

- 図版 30. 17) コバノミツバツツジ 葉 20) オンツツジ? 樹皮 23) ナシ 葉
 18) コバノミツバツツジ 全体 21) ソメイヨシノ? 葉 24) ナシ 樹皮
 19) オンツツジ? 葉 22) ソメイヨシノ? 樹皮

- 図版 31. 25) アセビ 樹皮 27) アセビ 全体 29) コナラ 葉 31) リョウブ 樹皮
 26) アセビ 葉 28) コナラ 樹皮 30) コナラ 全体 32) リョウブ 葉

- 図版 32. 33) イヌツゲ? 樹皮 36) ソヨゴ 樹皮 39) ツルマサキ 葉
 34) イヌツゲ? 葉 37) ソヨゴ 葉 40) コバノガマズミ 葉
 35) イヌツゲ 葉 38) ソヨゴ 全体

第1章 満濃池周辺の立地と環境

第1節 地理的環境

まんのう町は香川県仲多度郡南部の3町（満濃町、仲南町、琴南町）が、平成18年3月20日に合併して誕生した町である。香川県南西部に位置し、面積は約194.33k㎡になる。町の南側には標高1,000mを超える竜王山（1059.9m）、大川山（1042.9m）を主峰とする讃岐山脈が連なり、その麓を県下で唯一の一级河川である土器川が北流する。ちょうどこの土器川がまんのう町炭所西、吉野あたりから丸亀平野の南東部となり、丸亀平野が前面に広がる。地形的に見ると土器川右岸のまんのう町長尾は河岸段丘を呈し、古墳時代後期の古墳はこの河岸段丘上に立地している。一方土器川左岸、まんのう町吉野下を中心として平野が広がるが、地割がかなり乱れており、土器川と金倉川によってかなり不安定な平野であったと考えられる。この平野部北部から条里型地割が確認でき、徐々に安定した土地となっていたようである。

町内には約1000ヶ所のため池が点在しており、町の西部中央には町名の由来となっているため池「満濃池」がある。満濃池は土器川と財田川に挟まれた標高200～250mの丘陵状台地のほぼ中央部に立地する。満濃池は主水源である金倉川が平野部へ流れ出る峡谷をアーチ型の土堰堤で堰き止め、谷部の広大な範囲に約1,540万トンの水を貯えており、農業用ため池としては貯水量国内第一の規模を誇る。満濃池の主水源である金倉川は大川山の北西約1.5kmに所在する三ツ頭（標高753.6m）に源を發し、東谷川（土器川からの導水路）・本谷川（財田川からの導水路）・長谷川と合流し満濃池へと至る。満濃池の満水時の標高は約146.0mで、現まんのう町役場あたりの標高が約85.6mであることから、その差約60.4mを測る。満濃池に貯えられた水は金倉川を北西へ流下し、用水路や多くの小池によって結ばれ、丸亀平野西部を潤して瀬戸内海へ注いでいる。

満濃池付近の地形は北西へ發達した尾根が目立つ。その埋没した尾根の形状に従い満濃池の南西岸は入り組んだ形状を呈するのに対して、北東岸は北西方向へ延びる高屋原・龍頭丘陵状台地の南西側面を金倉川が浸食したことにより緩やかな曲線形を呈する。

第2節 歴史的環境

満濃池の水源となる金倉川・土器川・財田川上流地域は徳島との関係が深い地域である。現在は国道438号線が三頭トンネルを経由し、香川と徳島を結ぶ幹線道路となっているが、徳島との交流の歴史は旧石器時代まで遡る。旧石器時代の遺跡としては、金倉川源流の三ツ頭付近、香川・徳島県境付近に所在する古代山岳・山林寺院中寺廢寺跡の下層においてサヌカイト製の石器が出土している。これらの石器は蛍光X線分析により香川県五色台山系の白峰・国分寺・蓮光寺山産であることが判明しており、サヌカイトを介した阿波と讃岐の交流があった事を物語る。

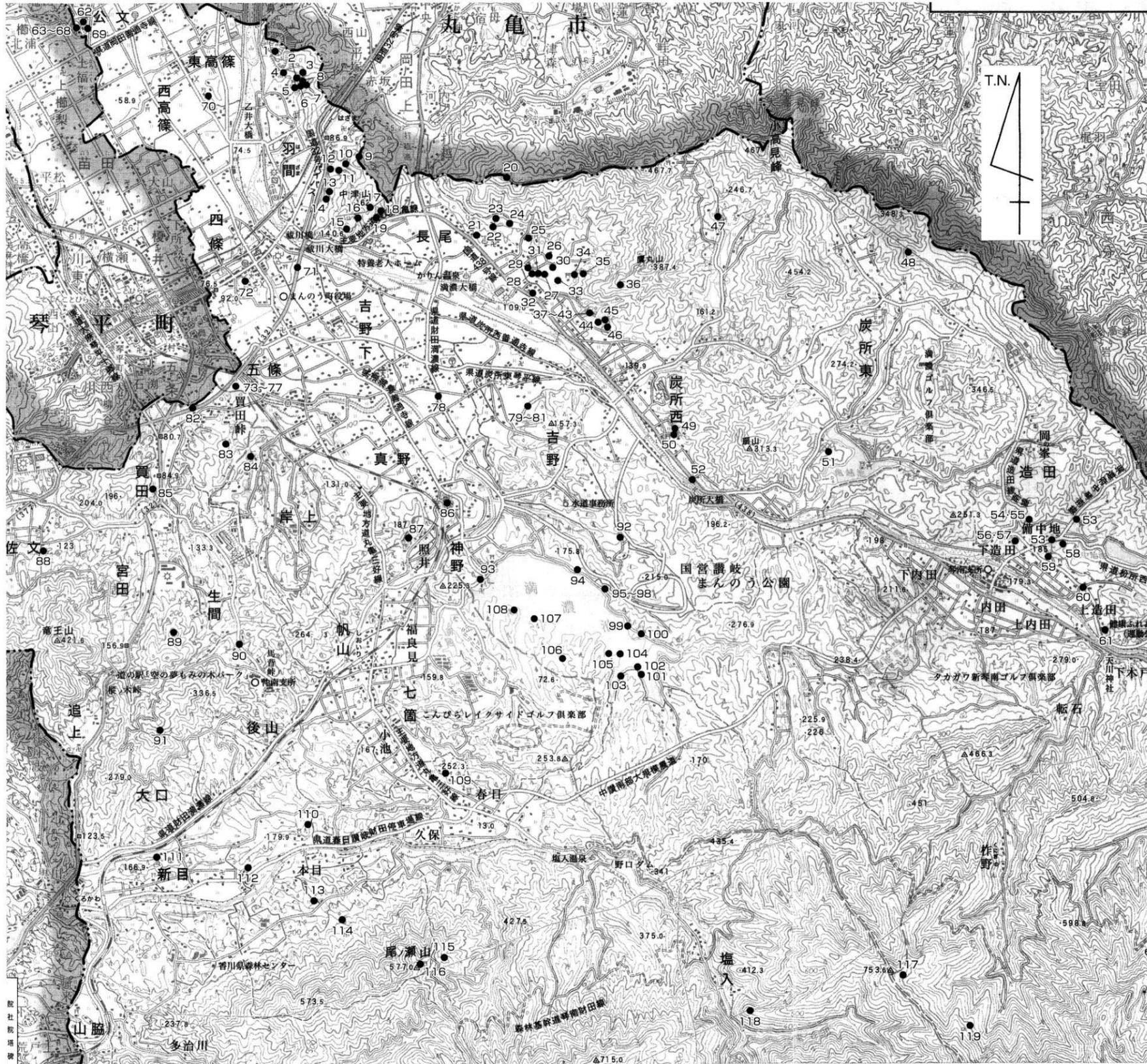
縄文時代の遺跡としては、土器川上流域の備中地遺跡において押型文期の遺物が出土している。また、まんのう町長尾付近では草創期の有舌尖頭器1点が郷土史家の大林英雄氏によって表採されている。

弥生時代の遺跡としては、河岸段丘上の町代遺跡において弥生時代中期後半の集落跡が確認されている。また、羽間遺跡においては弥生時代後期中葉の集落跡が調査され大型掘立柱建物跡が確認されている。さらに、羽間遺跡と同一の丘陵上に所在するまんのう町東佐岡では平型銅剣2口が出土している。このほか、吉野八幡神社で扁平紐2式に分類される袈裟襷文銅鐸の破片が出土し、さぬき市多和神社に収蔵されている。この銅鐸は東四国地域を主要分布件とする「名東型」とされるもので、県内での類例としては高松市牟礼町源氏ヶ峯出土銅鐸、善通寺市旧練兵場遺跡出土銅鐸の2例が確認されている。また、吉野八幡神社近隣に所在する中世城館大堀城跡の調査において少量の弥生土器片が出土しており、弥生時代の集落が付近に存在したと考えられる。

古墳時代の遺跡としては、古墳時代中期～後期において多数の古墳が確認されている。古墳が多く分布する地域は、長尾丘陵の南西側（河岸段丘上）、中津山周辺、西山南西側、公文山南側があり、いずれも丘陵の南西側斜面、土器川左岸を中心に分布する。今回調査した神野古墳等の発掘調査では箱式石棺と横穴式石室を確認したが、箱式石棺を埋葬主体とする古墳としては富熊神社南古墳、天神7ツ塚7号墳が確認されている。横穴式石室を持つ古墳としては草塚古墳、安造田東峠古墳、安造田東1・2・3号墳、安造田神社裏古墳、安造田神社前古墳、佐岡1・2号墳、断頭墓地1・2号墳、光明寺池上古墳、椿谷古墳、南泉寺1号墳、北山楠神社古墳、北山墓地1・2号墳、檜林清源寺1・2号墳、檜林山の神古墳、吉田神社前古墳、町代3号墳が確認されている。また、平野部に所在する吉野下秀石遺跡においては、竈付の竪穴住居跡多数からなる集落跡が確認されている。これらはほとんどが古墳時代後期を中心とするもので、平野部に集落が、土器川を挟んで河岸段丘上に墓域が形成されていたことを示唆する資料である。

古代の遺跡としては、弘法大師空海が修築したとされる満濃池があげられる。その詳細については次章にて述べる。寺院遺跡としては中寺廃寺跡や弘安寺跡があげられる。中寺廃寺跡は9世紀後半～11世紀後半にかけて、塔・仏堂・僧房などが山中で展開した山岳・山林寺院であり、阿讃国境の山岳修行の拠点として機能していたと考えられる。弘安寺跡は白鳳～奈良期の16葉素弁蓮華文軒丸瓦が出土した寺院跡である。また、買田岡下遺跡において9世紀頃の掘立柱建物跡多数からなる集落遺跡が確認されている。

中世の遺跡としては、戦国期讃岐屈指の規模を誇る山城跡である西長尾城跡（長尾城跡、国吉城跡）がある。また近年発掘調査が行われた大堀城跡では13～14世紀の区画溝を伴う集落跡が確認された。



第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	草塚古墳	古墳	古墳	61	霊仙寺跡	寺院	中世
2	西山西部1号墳	古墳	古墳	62	櫛梨山松ノ端城跡	城館	中世
3	西山西部2号墳	古墳	古墳	63	公文山1号墳	古墳	古墳
4	西山西部3号墳	古墳	古墳	64	公文山2号墳	古墳	古墳
5	出雲山1号墳	古墳	古墳	65	公文山3号墳	古墳	古墳
6	出雲山2号墳	古墳	古墳	66	公文山4号墳	古墳	古墳
7	出雲山3号墳	古墳	古墳	67	公文山5号墳	古墳	古墳
8	出雲山4号墳	古墳	古墳	68	公文山6号墳	古墳	古墳
9	安造田東岸古墳	古墳	古墳	69	富熊神社南古墳	古墳	古墳
10	安造田東1号墳	古墳	古墳	70	円浄寺跡	城館	中世
11	安造田東2号墳	古墳	古墳	71	吉野下秀石遺跡	集落	弥生~中世
12	安造田東3号墳	古墳	古墳	72	弘安寺跡	寺院	古代
13	安造田神社裏古墳	古墳	古墳	73	三塚山1号墳	古墳	古墳
14	安造田神社前古墳	古墳	古墳	74	三塚山2号墳	古墳	古墳
15	長尾大隅守一族の墓	墓	中世	75	三塚山3号墳	古墳	古墳
16	佐岡寺跡	寺院	古代	76	三塚山4号墳	古墳	古墳
17	佐岡遺跡	包含地	弥生	77	三塚山5号墳	古墳	古墳
18	佐岡1号墳	古墳	古墳	78	大塚城跡	山城	中世
19	佐岡2号墳	古墳	古墳	79	南泉寺1号墳	古墳	古墳
20	西長尾城跡(国吉城跡)	山城	中世	80	南泉寺2号墳	古墳	古墳
21	下王地古墳	古墳	古墳	81	南泉寺3号墳	古墳	古墳
22	断頭墓地1号墳	古墳	古墳	82	買田岡下遺跡	集落	古墳~中世
23	断頭墓地2号墳	古墳	古墳	83	買田峠古墳	古墳	古墳
24	光明寺池上古墳	古墳	古墳	84	椿谷古墳	古墳	古墳
25	天神塚古墳	古墳	古墳	85	丸山城跡	山城	中世
26	浦山古墳	古墳	古墳	86	小山古墳	古墳	古墳
27	町代1号墳	古墳	古墳	87	城丸城跡(怒の丸跡、照井城跡)	城館	中世
28	町代2号墳	古墳	古墳	88	佐文城跡	山城	中世
29	町代3号墳	古墳	古墳	89	阿弥陀堂跡	寺院	中世
30	北山・上田遺跡	集落	中世	90	生間城跡	山城	中世
31	町代遺跡	集落	弥生~中世	91	仲南藤目城跡	山城	中世
32	町代土居屋敷跡	城館	中世	92	龍頭龍王古墳	古墳	古墳
33	北山楠神社塚古墳	古墳	古墳	93	神野寺跡	城館	中世
34	北山墓地1号墳	古墳	古墳	94	神野1号窯跡	窯跡	古代
35	北山墓地2号墳	古墳	古墳	95	神野1号箱式石棺	古墳	古墳
36	金丸城跡	山城	中世	96	神野2号箱式石棺	古墳	古墳
37	天神七ツ塚1号墳	古墳	古墳	97	神野3号箱式石棺	古墳	古墳
38	天神七ツ塚2号墳	古墳	古墳	98	神野古墳	古墳	古墳
39	天神七ツ塚3号墳	古墳	古墳	99	葦谷古墳(滅失)	古墳	古墳
40	天神七ツ塚4号墳	古墳	古墳	100	葦谷遺跡	その他	弥生~古代
41	天神七ツ塚5号墳	古墳	古墳	101	長谷遺跡	その他	弥生・古代~中世
42	天神七ツ塚6号墳	古墳	古墳	102	長谷古墳	古墳	古墳
43	天神七ツ塚7号墳	古墳	古墳	103	長谷西遺跡	その他	弥生・古代
44	櫻林清源寺1号墳	古墳	古墳	104	岡の塚穴古墳	古墳	古墳
45	櫻林清源寺2号墳	古墳	古墳	105	神野岡遺跡	その他	弥生~中世
46	櫻林山の神古墳	古墳	古墳	106	神野岡北遺跡	その他	古代
47	金剛院経塚	経塚	古代	107	神野三田南遺跡	その他	古代
48	種子城跡	城館	中世	108	神野三田遺跡	その他	弥生・中世
49	吉田神社前1号墳	古墳	古墳	109	春日城跡	山城	中世
50	吉田神社前2号墳	古墳	古墳	110	本目城跡	山城	中世
51	大谷川城跡	山城	中世	111	前正善寺跡	寺院	中世
52	常包城跡	城館	中世	112	新目城跡	山城	中世
53	備中地遺跡	包含地	縄文~弥生	113	円徳寺跡	寺院	中世
54	城山遺跡	山城	中世	114	唐谷窯跡	窯跡	中世
55	備中地城跡	城館	中世	115	尾背庵寺跡	寺院	中世
56	梶袋塚	古墳	古墳	116	尾ノ瀬山城跡	山城	中世
57	造田遺跡	集落	中世	117	中寺庵寺跡	寺院	古代
58	庵山遺跡	その他	弥生	118	大西城跡	山城	中世
59	木下遺跡	集落	中世~近世	119	桜の産遺跡	その他	中世~近世
60	森本塚古墳	古墳	古墳				

第1表 遺跡一覧表

第2章 満濃池内調査の概要

第1節 調査の経緯・経過

満濃池は、「満濃池後碑文」によると大宝年間（701～704）に讃岐の国守道守朝臣によって創築された。以降洪水による決壊と弘仁12（821）年に築池使路ノ真人浜継、空海、仁寿2～3（852～853）年に国守弘宋王、寛永5～8（1628～1631）年に西島八兵衛らの再築を繰り返し、明治～昭和にかけての第1次～3次の嵩上げ工事を経て現在に至っている。貯水量は約1,540万m³で、国内で最大の灌漑用ため池である。

このように満濃池の創築・決壊・再築の長い歴史は確認されているが、満濃池の地理的環境、創築以前の様子、元暦元（1184）年に堤防が決壊した後、西島八兵衛によって再築されるまでの約450年間の「池内村」の様子、池内で確認された境界石など、まだまだ満濃池には確認されていない歴史がある。

まんのう町教育委員会では、国営讃岐まんのう公園による満濃池の北東側にある町道の整備に伴い実施した神野1号窯跡の調査を契機に、新たな満濃池の歴史を解明するために、満濃池内の踏査や満濃池の歴史、周辺の植生観察などの総合調査を実施した。満濃池内の踏査では満濃池創築以前に存在した古墳や弥生時代から中世にかけての遺物の散布状況を確認した。これらの古墳については『満濃町史』、『新修 満濃町誌』などに記載はあるものの「周知の埋蔵文化財包蔵地」としては認知されておらず、この調査を基に満濃池内の遺跡の整理・報告を行った。

また、満濃池内で確認した神野1号窯跡や神野古墳、神野1～3号箱式石棺については、汀線際にあることや池内にあることから、池水による侵食によって、近年旧状からかなり変化しつつあることが確認できた。そのため侵食により崩壊の危機に瀕しているものについては記録保存という措置をとった。

第2節 満濃池の地理的環境

満濃池が大宝年間（701～704）に造られる以前、ここはまんのう町神野岡からの長谷川、五毛からの本谷川、江畑からの金倉川・中谷川・東谷川によって開削された谷筋である。この谷筋は丸亀平野南東部の平野部へと開く部分で、南部分の丘陵と北部分の丘陵状台地から延びる小丘陵の間隔が狭くなり、ちょうどこの部分を堰き止めることにより、満濃池は造られたものと考えられる。したがって満濃池築造以前の谷筋は、南北の丘陵に囲まれた盆地状を呈していたものと考えられる。現在の満濃池北東岸側はほぼ真っ直ぐな境界線を持ち、南西岸側は北方向に蜘蛛手状に延びた丘陵により幾重にも入り組んだ境界線（汀線）となる。

参考文献

1975 『満濃町史』満濃町

2005 『新修 満濃町誌』満濃町

第3節 満濃池内の踏査結果

神野1号窯跡の発掘調査が終了した後、満濃池内に所在する遺跡を確認するために、平成19年6月1日～6月3日の間の数日間、満濃池内の踏査を実施した。踏査は満濃池内の汀線際を歩き、地表面で確認できる遺物の採集のみで、掘削等は行っていない。

地形的に見ると現在の満濃池は、堤防から池尻に向かって左側を北東岸側、右側を南西岸側とすると、北東岸側が若干突出した丘陵により凹凸はあるもののほぼ真っ直ぐな境界線（汀線）となり、南西岸側は北方向に蜘蛛手状に延びた丘陵により幾重にも入り組んだ境界線（汀線）となる。またその汀線の特徴として北東岸側はほとんどが緩やかな傾斜面を呈するのに対し、南西岸側はほとんどが急な傾斜面を呈している。ただし満濃池の堤防手前から奥側3分の1は両岸とも緩やかな傾斜面を呈し、谷が急に狭くなっていることが、池水面の広がりから解る。池底面の地形については不明であるが、中世に「池内村」が存在していたことからかなり耕地面積が確保でき、居住に適していた地形であったことが窺われる。

踏査の結果、42箇所遺物を採集した（第2・3表）。採集地点を平面的に見ると特に満濃池南西岸側を中心に遺物が分布していることが解る。また部分的に多量に遺物の出土する地点あり、近接して遺跡の存在が想定できる。

表採遺物は弥生時代～中世までの長期間にわたり、特に弥生時代の遺物が多い。

弥生時代では南西岸側のほぼ全域で採集されており、⑳～㉔地点では多量に採集している。内容は弥生土器・サヌカイト製品を中心に、㉔地点では紡錘車・磨製石斧なども採集した。特に㉔・㉔地点では1.0～5.0cm台のサヌカイトの剥片を多量に採集しており、近接して集落の可能性が指摘できる。㉔～㉔地点の遺物採集地背後の丘陵を見ると丘陵上面がかなり広く、しかも平坦であることが解る。また、北東岸側に比べると北西風を直接受けないために、居住域に適した環境であったことが窺われる。時期は弥生時代中期末～後期にかけての遺物である。

古墳時代では南西岸側の31～38地点で少量、遺物を採集している。このあたりは岡の塚穴古墳、長谷古墳が確認されている地点である。岡の塚穴古墳は㉔・㉔地点の丘陵先端部に位置し、現状で墳丘は確認できない。しかし古墳の中央部と考えられる部分には石室の構築材と考えられる花崗岩が数個確認でき、現状では花崗岩の上部、1.0～1.7mの範囲が露出している。また先端部外側の墳丘外面には、20～50cmと大振りの川原石（砂岩）が葺かれた状態で確認できる。この古墳周辺で採集した遺物は、69～71である。69は須恵器坏蓋で、天井部と口縁部の境に僅かに屈曲部を持つが、天井部から緩やかに口縁部に至り、口縁端部内面に段を持つ。70は須恵器坏身で、しっかりした受部を持ち、やや内傾した細い立ち上がりを持つ。71は甕の頸部から口縁部で、頸部外面を4条の沈線で5つに区画し、上から1・3段目に右斜めの櫛先刺突文を、4段目に左斜めの波状文が施されている。櫛先刺突文及び波状文の原体は同一のものである。時期は須恵器坏身から、TK209型式（7世紀前半）と考えられる。長谷古墳は、平成14年に旧満濃町文化財保護協会（会長高瀬盛重）が満濃池内を調査した際に確認した古墳である。まんのう町吉野字長谷にあり、南西岸側から北方向に延びる丘陵先端部に独立した円墳状の墳丘があることから古墳では



第2図 満濃池内遺物採集位置図・満濃池内遺跡位置図

第2表 満濃池内採集遺物一覧表(1)

表採地点	遺物内容	時期	備考	実測遺物
①	土師器小片	中世		
②	土師器坏、土師質土鍋	中世		第3図1
③	須恵器壺・甕	古代(8～9世紀)	壺は高台が付くもので、甕は体部外面に併行叩き痕が、内面には無文の当具痕あり。	第3図2・3
④	須恵器壺	古代		
⑤	須恵器壺・甕、土師質土器片	古代(8～9世紀)	壺は高台が付くもので、甕は体部外面に格子目叩き痕が、内面には無文と同心円状の当具痕あり。	第3図4・5
⑥	弥生土器壺底部、須恵器甕	弥生時代、古代	弥生土器の壺の底部はしつかりした平底。	
⑦	須恵器細頸壺、土師器坏	古代、中世		第3図6
⑧	サヌカイト片、須恵器細頸壺・甕、土師質土器片	弥生時代、古代	須恵器片を多量に表採。甕の体部外面には併行叩き・格子目叩き痕が、内面には同心円状の当具痕あり。内外面とも無文の壺体部片あり。	第3図7～9
⑨	須恵器甕・把手	古代(9世紀)	須恵器片を多量に表採。甕の体部外面には併行叩き痕が、内面には同心円状の当具痕あり。	第3図10～12
⑩	サヌカイト	弥生時代	製品としてスクレイパーあり。	
⑪	サヌカイト片	弥生時代	剥片	
⑫	弥生土器壺	弥生時代(中期末)	1/3個体程度の壺破片を採集。	第3図13
⑬	弥生土器甕、石包丁(サヌカイト製)・サヌカイト片、土師器椀・坏	弥生時代(中期末)、中世(13世紀)	石包丁は完形品。土師器椀は底部にかなり退化した高台あり。	第3図14
⑭	サヌカイト片	弥生時代	調整あり。	
⑯	弥生土器片、土師器坏	弥生時代、中世	土師器坏の底部はヘラ切り。	
⑰	須恵器片	古墳時代		
⑱	土師器片	中世		
⑲	サヌカイト片	弥生時代	調整のあるサヌカイト片あり。	
⑳	弥生土器甕、サヌカイト片、須恵器	弥生時代(後期)、古代	弥生土器甕の口縁部がかなり退化。	第3図15
㉑	サヌカイト片	弥生時代	石包丁、スクレイパー片あり。	
㉒	須恵器片、土師器坏	古代(10世紀後半～11世紀前半)	土師器坏を多量に表採。ほぼ同形態。	第3図16～28
㉓	サヌカイト片、須恵器甕片、土師器片	弥生時代、古代、中世	甕の体部外面には格子目叩き痕が、内面には無文の当具痕あり。	
㉔	須恵器片、土師器坏、土師質土釜	古墳時代、中世(13世紀後半～14世紀前半)	須恵器には東播系須恵器こね鉢あり。土釜は三足。	第3図29・30
㉕	弥生土器片、サヌカイト片	弥生時代	調整のあるサヌカイト片あり。	
㉖	須恵器甕片	古代	甕の体部外面には格子目叩き痕が、内面には無文の当具痕あり。	
㉗	弥生土器甕片	弥生時代		
㉘	須恵器片	古代		
㉙	弥生土器甕、石製品(石包丁、石斧、紡錘車)、須恵器、土師器、窯壁	弥生時代(中期末)、古代、中世	弥生土器・石製品が多量に出土。サヌカイト製の石包丁は完形品。磨製柱状片刃石斧、穿孔途中の紡錘車。土師器坏の底部はヘラ切り。近接して窯跡の可能性。	第4図31～38
㉚	弥生土器壺・甕・高坏、サヌカイト片、須恵器片、土師器片、土師器小皿	弥生時代(中期末)、古墳時代、古代(8世紀末～9世紀前半)、中世	須恵器坏蓋・ハソウ、高台付き坏身・蓋、坏、須恵器甕には体部外面に格子目叩き痕が、内面には無文の当具痕あり。土師器小皿の底部はヘラ切り。遺物多量に表採。	第4図39～45
㉛	サヌカイト片、須恵器、土師質土釜	弥生時代、古代、中世中世(14世紀～15世紀)	調整のあるサヌカイト片あり。土釜は三足。	第4図46
㉜	弥生土器片・甕、サヌカイト片、須恵器片、須恵器高台付き坏身、土師器片	弥生時代(中期末)、古代(8世紀)、中世	調整のあるサヌカイト片あり。須恵器片には古墳時代の坏身・蓋の破片あり。須恵器甕には体部外面に格子目叩き痕が、内面には無文の当具痕あり。	第4図47～49
㉝	弥生土器片・甕、サヌカイト片・石鏃、須恵器片・高台付き坏身、土師器片	弥生時代(中期末～後期初頭)、古代(8世紀末～9世紀前半)、中世	調整のあるサヌカイト片あり。弥生土器甕の口縁端部には2条の沈線、体部内面にはヘラズリあり。遺物多量に表採。	第5図50～56
㉞	サヌカイト片	弥生時代		
㉟	サヌカイト片、須恵器高台付き坏身・蓋、壺、甕	弥生時代、古代(8世紀)	池内傾斜面に幅約5.0m、厚さ約0.2mの炭化物層が確認でき、その周辺を中心に多量の須恵器が散布する。	第5図57～66
㊱	サヌカイト片、須恵器甕	弥生時代、古代(12世紀)	須恵器甕には体部外面に格子目叩き痕が、内面には無文の当具痕あり。	第5図67

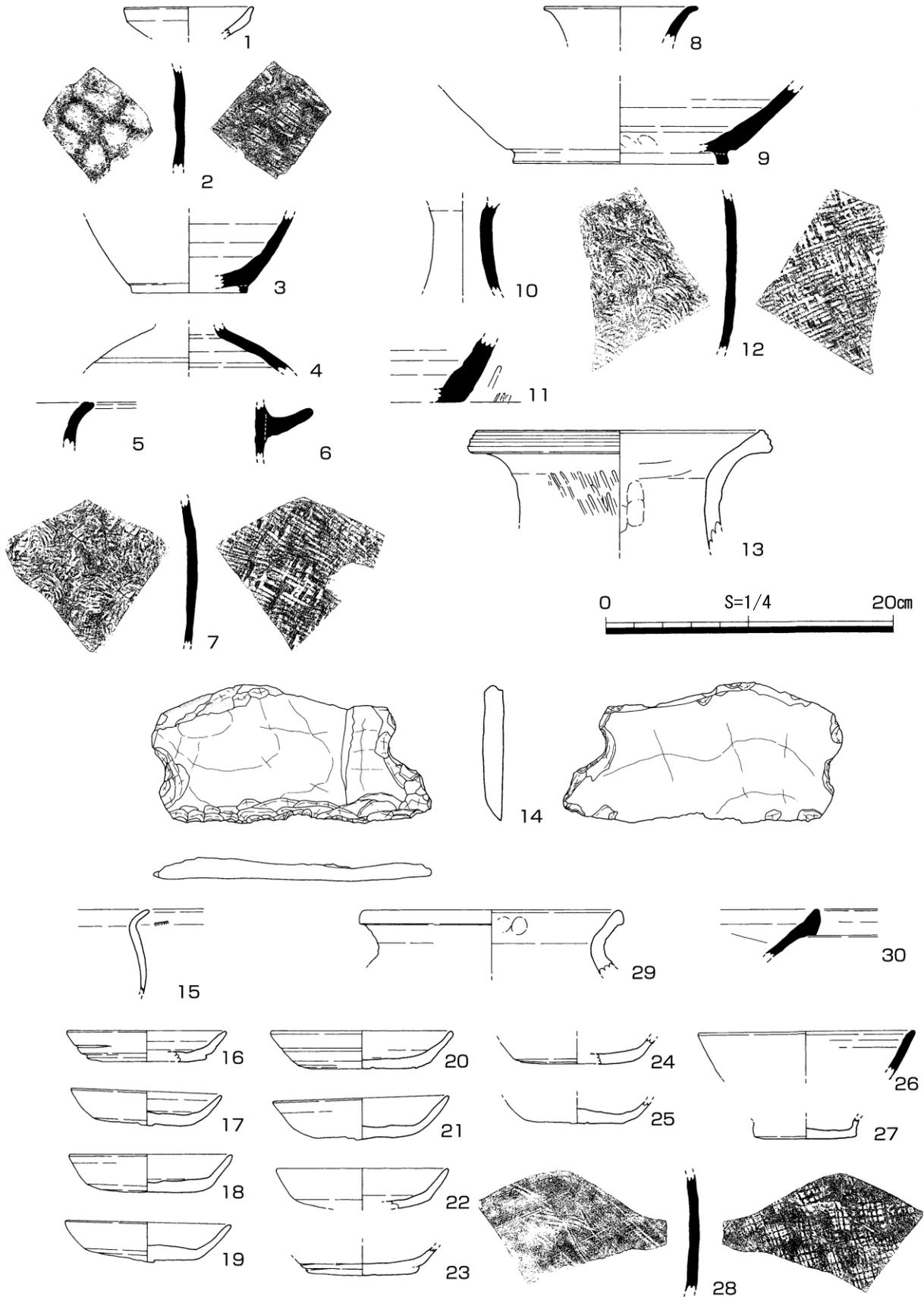
第3表 満濃池内採集遺物一覧表（2）

表採地点	遺物内容	時期	備考	実測遺物
37	サヌカイト片、石斧、須恵器片	弥生時代、古代	石斧は磨製の柱状片刃石斧。	
38	弥生土器片、サヌカイト片、須恵器片、土師器片	弥生時代、古代、中世	サヌカイト片を多量に表採。須恵器には古墳時代のものと8世紀のものあり。	
39	弥生土器片、サヌカイト片、須恵器片、須恵器高台付坏身、土師器片	弥生時代、古代(7世紀末～8世紀初頭)、中世	須恵器高坏の破片あり。	第5図68
40	弥生土器片、サヌカイト片、須恵器片	弥生時代、古墳時代、古代(8世紀)	古墳時代の須恵器坏蓋片、8世紀の須恵器高台付坏蓋。須恵器甕には体部外面に細かい格子目叩き痕が、内面には同心円状の当具痕あり。	
41	サヌカイト片、須恵器片	弥生時代、古代		
42	土師器	中世		

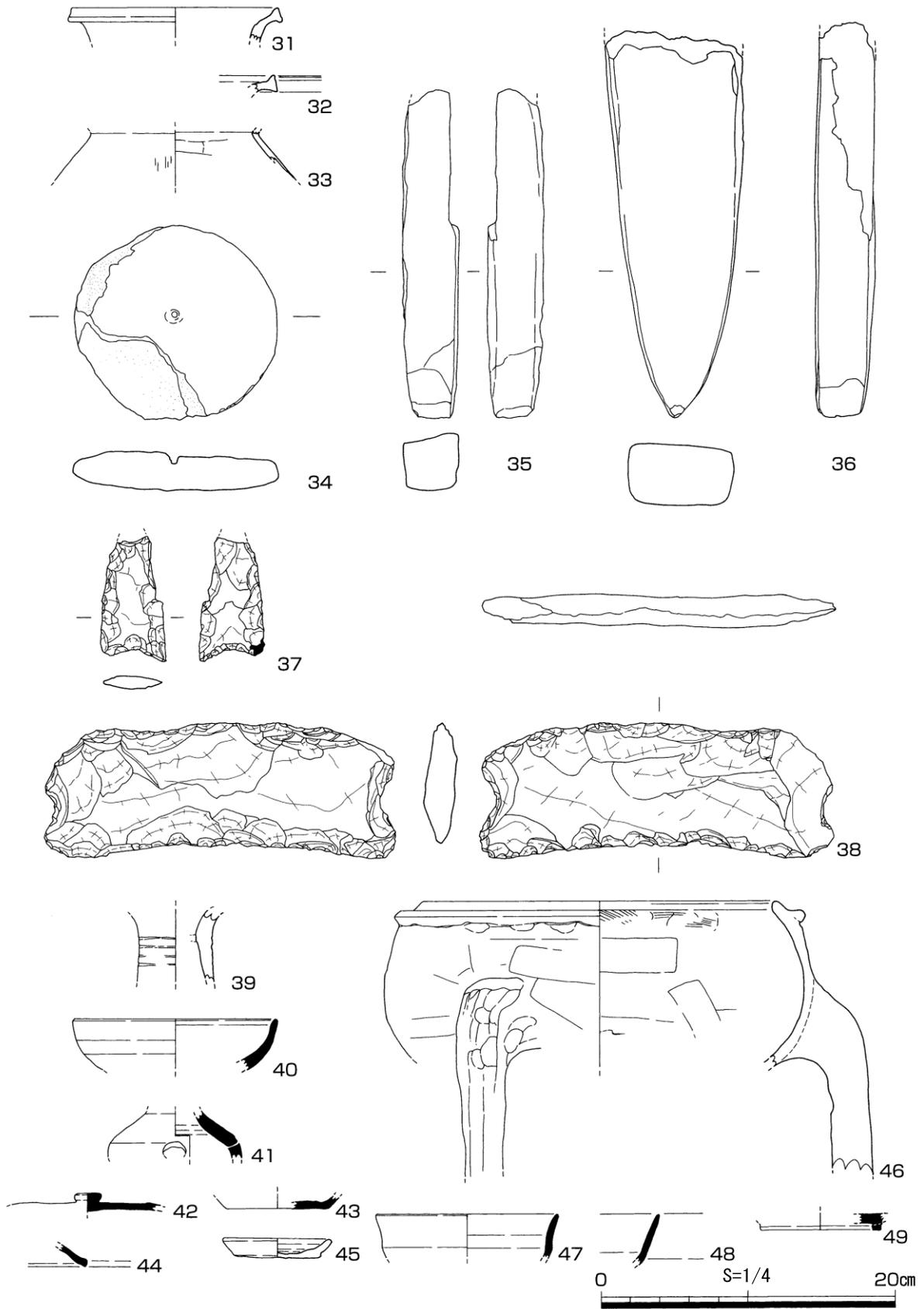
ないかと推定し、長谷古墳とした。しかし、確証は無く、周囲から古墳時代の遺物が採集できるものの、供伴遺物かどうかは確定できない。一方北東岸側では神野古墳、箱式石棺3基を確認した。神野古墳は北東岸側にある丘陵状台地から南西方向に延びる小丘陵の先端部で確認した古墳で、池水の浸食により現状では石室を構築した石材が「L」字状に残存するのみで、墳丘も含め、石室のほとんどが崩壊している。この古墳は新規発見としてまんのう町神野字神野に所在することから「神野古墳」とした。ところで北東岸側には、満濃町史（1975）、新修満濃町誌（2005）によると「葦谷古墳」の存在が記述されている。この古墳の位置を位置図で見るとまんのう町神野字葦谷にあり、この小字地区はまんのう町神野字神野の一部に「葦谷」の小字名があることが解る。町史、町誌の記述では「池水に浸食され墳丘は崩れている。」とあり、また満濃町文化財協会会報第34号には「町道五毛線の下にあり、満水時は同様に水没する。」「池水による侵食と風化が進み、」「構築石材に大型のものは見当たらないが、須恵器の破片により古墳と推定・・・」とある。これらの記述からすると「葦谷古墳」は池内に水没した古墳で、僅かに構築石材が残存していることが推測できる。しかし、まんのう町教育委員会による今回の踏査で、「葦谷古墳」の痕跡は確認できなかった。まんのう町神野字葦谷の小字名地区が神野字神野の小字地区の一部にあることと今回の踏査で確認できなかったことから、「神野古墳」と「葦谷古墳」が同一のもの可能性も考えられ、町史、町誌、会報の記述もかなり混乱しているものと考えられる。しかし、ここでは「葦谷古墳」と「神野古墳」は別の古墳とする。「神野古墳」から満濃池堤防方向に約30～50m地点あたりでは、箱式石棺3基を確認した。全て石棺長軸を池内傾斜面の等高線に併行させるもので、蓋石はないものの側石が残っているもの1基、側石がかなり崩壊しているもの2基がある。

古代では8～9世紀代を中心に、南西岸側全域で遺物を表採している。特に⑧・⑨地点では多量に須恵器甕の破片を採集しており、ちょうど弘仁12（821）年、仁寿2～3（852～853）年の満濃池の再築となんらかの関係がある遺物ではないかと考えられる。また、⑳地点では池内傾斜面に幅約5.0m、厚さ約0.2mの炭化物層を確認しており、その周辺から多数の須恵器を採集した。この炭化物層が須恵器の窯の灰原の可能性もあり、周囲に須恵器窯の存在が指摘できる。採集遺物は須恵器高台付き坏身・蓋を主としており、これらの時期は8世紀である。

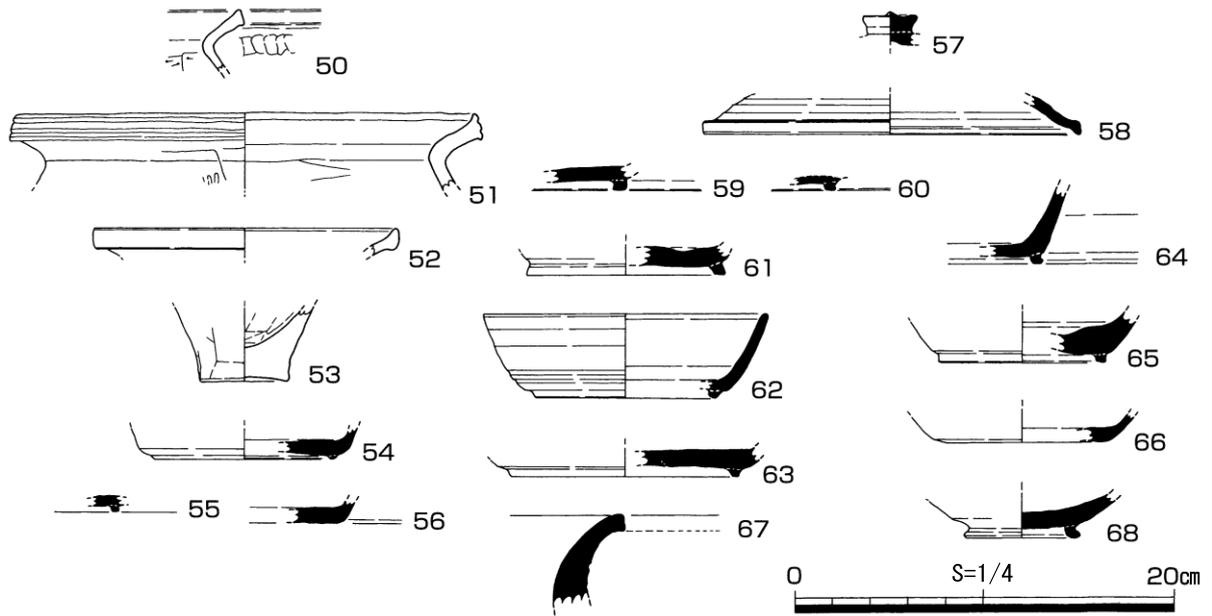
中世では南西岸側のほとんどの地点で、遺物が表採されている。採集した遺物は土師器小皿・坏、土師質土釜（三足）で、ちょうど「池内村」があったといわれる時期に該当し、当時使用さ



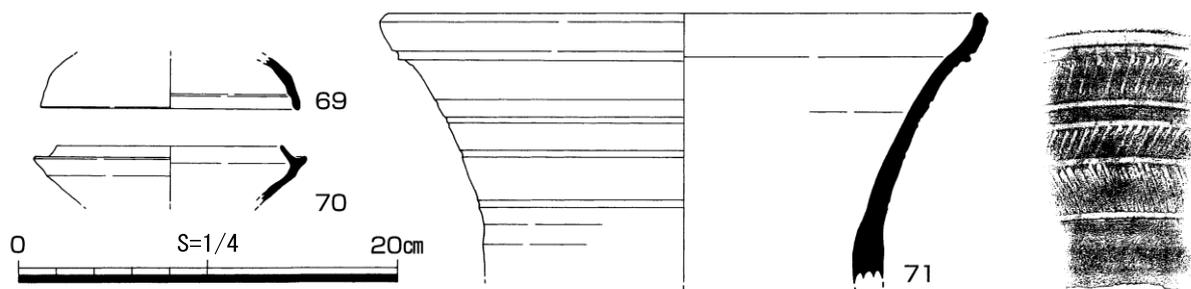
第3図 満濃池内採集遺物実測図(1)



第4図 満濃池内採集遺物実測図(2)



第5図 満濃池内採集遺物実測図（3）



第6図 岡の塚穴古墳採集遺物実測図

れていたものとする。

弥生時代～中世にかけての遺物が採集できる地点として㉑～㉓地点がある。この周辺では昭和20～30年代の第三次嵩上げに伴い、移住を余儀なくされた集落の痕跡が確認できる。おそらく、弥生時代～近代・現代にかけて居住域としてかなり安定し、適した場所であったことが窺われる。

参考文献

- 1975 『満濃町史』満濃町
- 2003 『満濃町文化財保護協会会報第34号』
- 2005 『新修 満濃町誌』満濃町
- 1985 松本敏三「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』

第3章 神野古墳、神野1～3号箱式石棺

第1節 はじめに

満濃池内の踏査で確認した3基の箱式石棺については、満濃町史（満濃町1975）及び新修満濃町誌（満濃町2005）に記述は無く、唯一香川県教育委員会によって昭和57・58年に実施された香川県古代窯業遺跡分布調査の報告書（1983 松本敏三）の写真2「満濃池東岸窯」のキャプション部分に「写真手前の斜面上方に箱式石棺数基」と記載されているに過ぎない。そのためこれら3基の箱式石棺については新発見の遺構として、ここでは「神野1～3号箱式石棺」とした。一方古墳は、平成14年の満濃町文化財展－満濃池築堤千三百年記念「ほりおこし池の今昔展」－（満濃町2003）にむけて、旧満濃町文化財保護協会（会長高瀬盛重）が満濃池内の踏査を実施した際に発見したもので、満濃池の満水時には水没し、池水の浸食によってかなり崩壊していた。当時満濃町文化財展ではこの古墳を「葦の谷古墳」として報告しているが、満濃町史・新修満濃町誌記載の葦谷古墳の位置及び今回報告古墳の所在する位置の小字名が「葦谷」ではなく、「神野」と違うことから、ここでは「葦谷古墳」とは別の新発見の古墳と考え、「神野古墳」として報告する。

第2節 調査の経緯・経過

この神野古墳、神野1～3号箱式石棺は、満濃池の北東岸、堤防から約1.25km、神野1号窯跡から約0.35km、汀線の標高約147mから約4.0～7.0m下の標高約143～140mに位置する。満濃池の満水時には水没し、池水による侵食と風化をかなり受けているものと思われ、特に古墳については、当時踏査を実施した満濃町文化財保護協会の会員の近兼氏から、平成14年に確認した時と比べるとかなり変化していると窺った。そのためまんのう町教育委員会は、満濃池内に所在する遺構が侵食と風化によって、旧状からかなり変化しつつあることから、急遽これら古墳群の侵食と風化に対する保護及び保存を目的として、平成19年6月1日～平成19年6月28日に発掘調査を実施した。

第3節 地理的環境

満濃池は、『讃岐国萬濃池後碑文』によると讃岐の国守道守朝臣によって大宝年間（701～704）に築造されたとある。この満濃池の築造以前の状況は、まんのう町神野岡からの長谷川、五毛からの本谷川、江畑からの金倉川・中谷川・東谷川によって開削された谷筋であった。その谷筋奥部において北側・南側の丘陵から延びる小丘陵によって若干谷部が狭くなる部分の手前の北東岸側に、神野古墳、神野1～3号箱式石棺は位置している。更に詳細に背後の小丘陵も含めて地形を見ると、満濃池の北東岸にある丘陵状台地から西方向に小丘陵が延び、その先端部及び側面部にこれらの古墳・箱式石棺は位置していることが解る。現状では神野古墳の位置する部分のみがその小丘陵の先端部分となっており、背後の丘陵から延びた小丘陵が痩せ尾根となり、古墳の位置する部分が先端となるように延びていたものと考えられる。

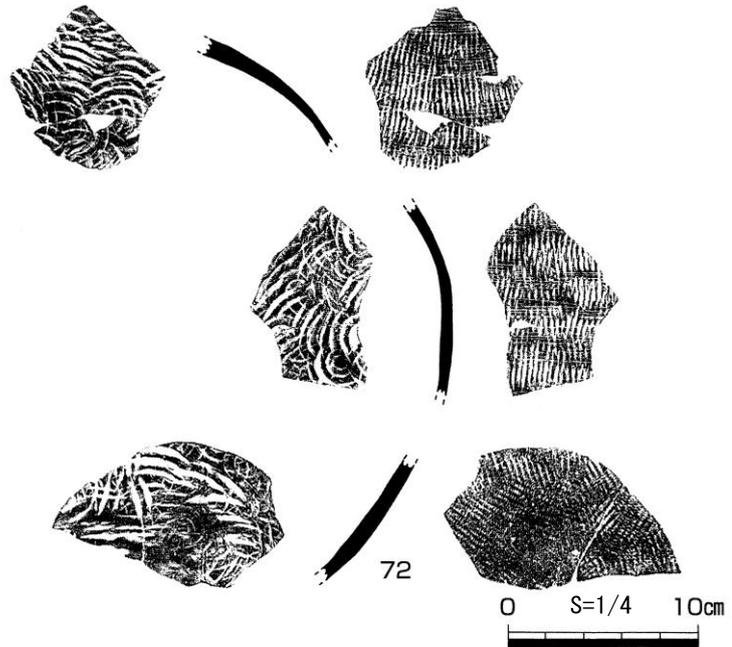
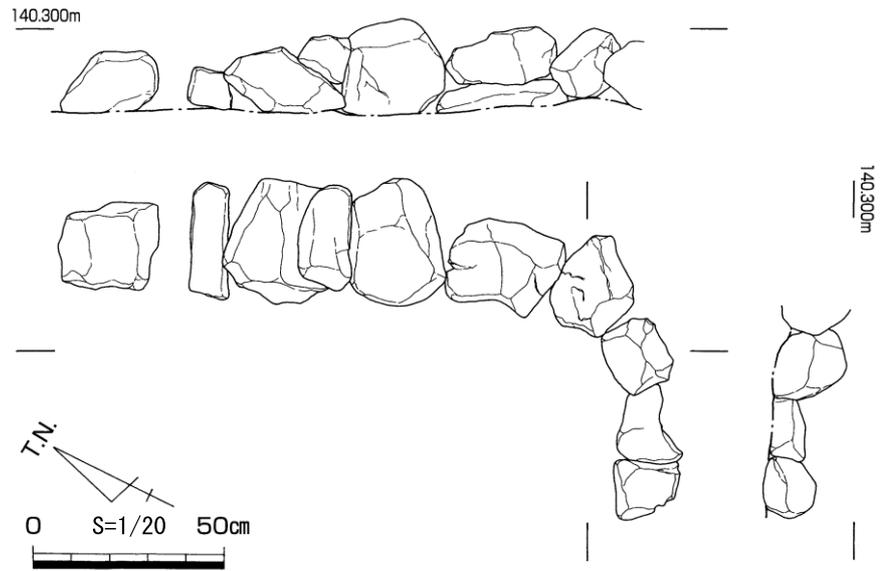


第7図 神野古墳、神野1~3号箱式石棺周辺地形測量図

第4節 神野古墳

(1) はじめに

神野古墳は満濃池の北東岸側にある丘陵状台地から南西方向に延びる小丘陵の先端部で確認した。小丘陵はかなり浸食され、現状では幅約13.0m、長さ約7.0m、突出した状態となっている。その先端部上、標高約140.1mで石列を「L」字状に確認し、石列の配置や配列から古墳の石室と考えられる。また、突出部の左右（南北）で、暗茶灰色に変色した部分を幅1.5～2.0mで確認し、その部分が若干窪んでいることから周溝と考え、復元すると直径約10.0mの小円墳であることが解る。ただし、周溝のトレンチ調査を行っていないので、深さ等は不明である。その周溝のほぼ中央部に今回確認した石列が位置している。



第9図 神野古墳周辺採集遺物実測図

(2) 遺構について

石列は突出部先端で東側7石と南側3石が「L」字状に残存し、東側は現存長約1.5m、南側は現存長約0.5mを測る。西側と北側は突出部先端部の段差で、削平を受けているものと考えられ、残っていない。この残存する石列が古墳の石室（玄室）と考えると、長辺部分（東側）は奥壁に向かって左側の玄室側壁で、短辺部分（南側）は奥壁となり、開口部は北側に向く。石列は一部2段になっているが、ほとんどは地山上（整地土・版築土の可能性あり）に一段しかなく、直に据えられていることから、ほとんどが基底石と考えられ、その現存高は10～25cmを測る。

左側壁は10～30cm程度の川原石（砂岩）を奥壁側は直列状に、手前側は方柱状の川原石の小口部分を内側に向けるように据えられている。奥壁は左側壁よりやや小振りの10～20cm程度の川原

石（砂岩）を不規則に据えている。左側壁・奥壁ともにしっかりした基底石ではなく、上部に石材を構築するには不安定な基底石である。左側壁と奥壁は緩やかに弧を描きながら連続しており、明確な角を持たない。玄室現存長は約 1.5m、現存幅は約 0.6m を測り、開口方向は北方向の $N-26^{\circ}-W$ となる。この開口方向はちょうど丘陵の延びる方向に概ね直交する方向である。周溝は突出部の南北で、暗茶灰色に変色した部分が確認したのみで、詳細は不明であるが、推定復元すると直径約 10.0m の小円墳であった可能性が高い。

（3）遺物について

石室内から遺物は出土しておらず、石室西側の一段低くなった部分で、須恵器片を採集した。須恵器は壺の破片と考えられる。図化したのはその内の 3 点で、72 の上は体部上半と考えられ、外面には縦方向の併行叩き（幅約 3mm）の後横方向の粗い刷毛目が施され、内面には同心円状の当具痕が施されている。体部下半と考えられる。72 の下は体部下半部分で、体部外面に 1×3 mm 程度の格子叩きが施され、内面には同心円状の当具痕が施されている。底部に近い側は内外面ともかなり摩滅している。胎土・色調・焼成は 3 点とも近似するが、体部外面の調整が 72 の上・中については縦方向の併行叩き、72 の下は格子叩きと異なることから、別固体の可能性も考えられる。

壺の体部調整から、時期は TK10 型式、6 世紀中葉頃と考えられる。ただし、この須恵器が神野古墳に供伴する遺物であるかは不明で、参考資料としたい。

第 5 節 神野 1 号箱式石棺

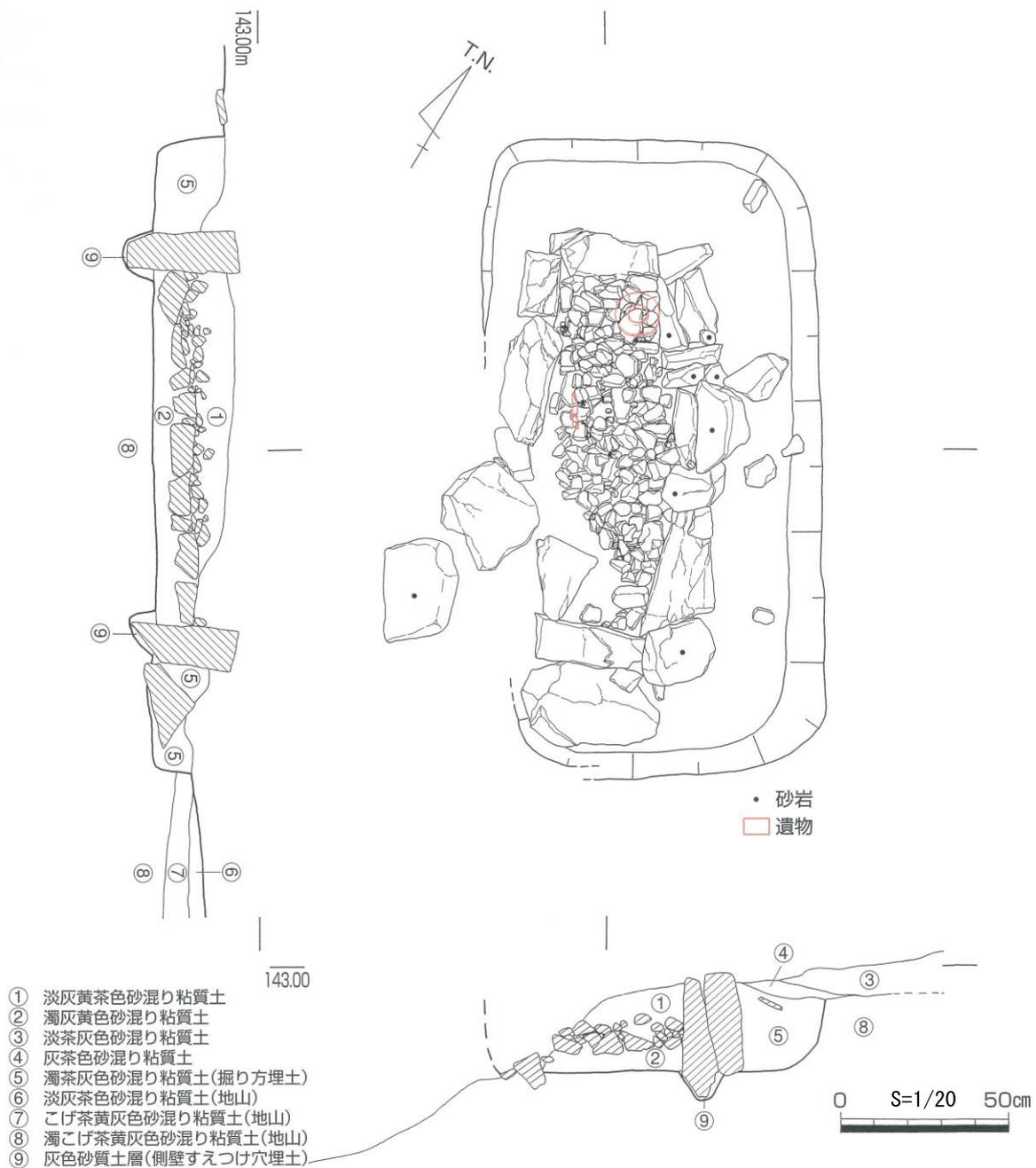
（1）はじめに

神野 1 号箱式石棺は、神野古墳から北に約 50.0m の地点、標高約 142.9m で、長軸が現在の池内の傾斜等高線とほぼ併行するように検出した。検出時には蓋石がすでになくなっていたが、小口・側壁の上部が長形状に認められたため、小形の箱式石棺と判断した。蓋石がなく、水没していたために石棺内部は流土で埋まり、また南西部の側壁 2 石が崩れ、倒れた状態であった。

（2）遺構について

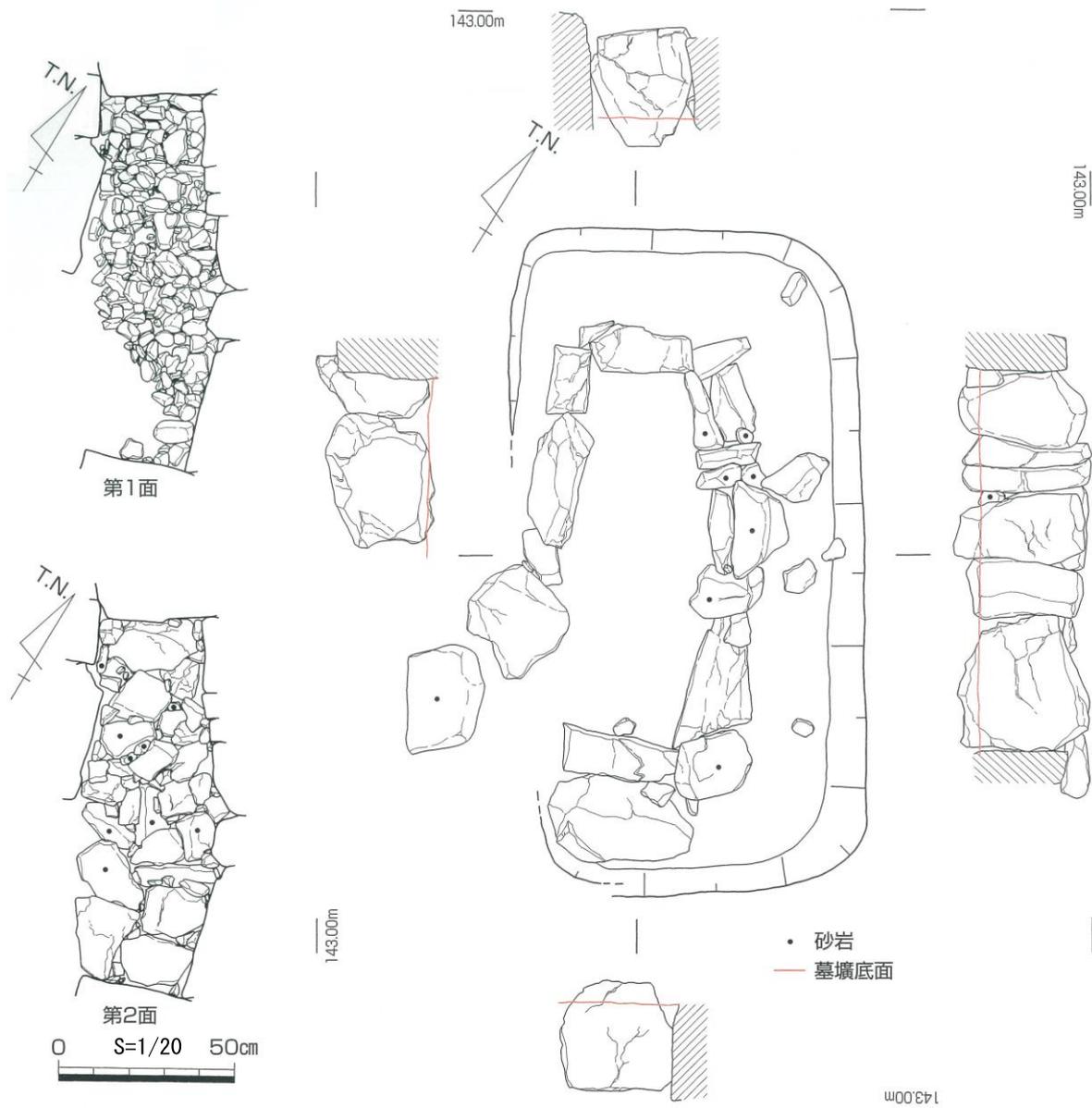
石棺内堆積土は 1 層で、淡茶灰色砂混じり粘質土が堆積する。この堆積土を取り除くと長軸で約 1.10m、短軸で北端幅約 0.27m、中央幅約 0.40m、南端幅約 0.30m の胴張りの箱式石棺を検出した。床面全面には 3.0~10.0 cm 程度の川原石（砂岩）が敷き詰められ、床面の南西部は側壁の崩壊とともに川原石も流失し、下位には 20.0~30.0 cm の角礫が認められた。最初に検出した川原石の床面を第 1 面とし、下位の角礫の面を第 2 面とする。側石は小口が 30.0×30.0 cm の角礫を 1 枚で、側壁は 15.0×40.0 cm の角礫と 6.0×20.0 cm の円礫で構築している。長軸の主軸は、 $N-31^{\circ}-W$ をとる。

第 1 面は最終の埋葬床面と考えられ、南西隅部分が流失してはいるものの床面全面に 3.0~10.0 cm 程度の川原石（砂岩）が敷き詰められていたものと考えられる。特に川原石に規則性は認められない。床面はほぼ水平で、床面北東隅から須恵器短頸壺 1 点を正位置で検出し、西側側壁



第10図 神野1号箱式石棺検出状況 平・断面図

際のほぼ中央部分では刀子1点を検出した。第1面の最終床面からはこの2点のみで、他に遺物は出土していない。この第1面を形成する埋葬床面上面の標高は約142.85mで、川原石は平均約5.0cm程度の厚さで敷き詰められていた。この第1面から側石上端までは約10.0cmを測り、かなり浅い。この第1面を形成する川原石を除去すると床面全面に7.0×10.0cm～25.0×30.0cm、厚さ3.0～6.0cm程度の角礫で、上面を揃えて敷き詰めている状態で検出した。これを第2面とする。石材は基本的に安山岩の角礫を使用し、●点部分は川原石(砂岩)を使用しているが、その配置には規則性はない。しかし詳細に見ると北半分で使用されている角礫がやや小振りであることが確認できる。第2面上面の標高は約142.80mで、概ね水平であるが、北半分に若干の窪みが確認できる。そのためにこの部分のみ上位の川原石が厚く堆積する。第1面から出土した遺物の配置



第10図 神野1号箱式石棺検出状況 平・断面図

から埋葬頭位は北側と考えられ、第2面の北側半分がやや小振りであることや第1面を形成する川原石がやや分厚く堆積することと何らかの関係があるものと思われる。その理由については頭位部分を意識した結果と考えられるが、推測の域を出ない。第2面を形成する角礫を除去すると、地山（第⑧層濁こげ茶黄灰色砂混じり粘質土）との間に第②層濁灰黄色砂混じり粘質土が5.0～6.0cm程度堆積する。この層は地山を整形し、第2面の水平面を調整するにあたり、角礫下面の凹凸を相殺するために置かれた土層と考えられる。

側石は北側・南側の小口ともに大きさ約30.0×30.0cm、厚さ約10.0cmの安山岩角礫を使用している。側壁は完全に残っている東側は上面から見ると8石使用していることが解り、側面から見ると6石の使用であることが解る。西側側壁から推測すると角礫を直列状に小口部分を接するように配置しているが、東側側壁は一番南側の1石のみは直列状を呈するが、北側は側面→小口面→側面→小口面と交互に接するように、また部分的に2重になるように配置していることが解

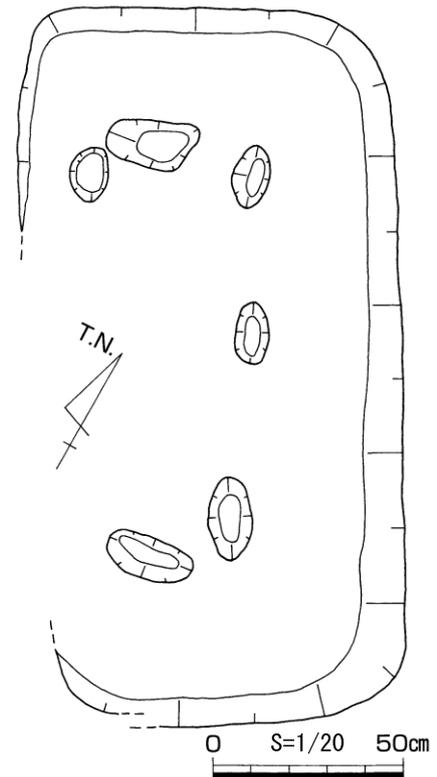
る。また、この部分にやや小振りの5石の川原石（砂岩）を使用しているが、規則性は認められない。西側側壁は大きさ17.0×30.0 cm～30.0×40.0 cmの角礫と川原石を4石使用して、構築している。そのうち現位置にあるのは北側2石で、南側の2石については西側に転倒した状態で検出した。川原石は1番南側の1石のみで、その配置にも規則性は認められない。側壁及び小口全てに側石底面の大きさとほぼ同形態の掘り方が確認でき、全て地山を5.0～10.0 cm程度掘削し、据えつけたことが解る。

この第1号箱式石棺の外側で、墓壙と考えられる掘り方を検出した。平面形態は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸で約1.90m、残存部分の短軸で約1.0m、深さ約0.2mを測る。石棺はその墓壙のやや西寄りに配置されている。掘り方内には第⑤層濁茶灰色砂混じり粘質土が堆積する。また、掘り方内には5.0～20.0 cmの角礫が少量混じる。特に南側小口の外側には裏込め石として大きさ25.0×45.0 cm、厚さ15.0 cmの角礫が配置されている。

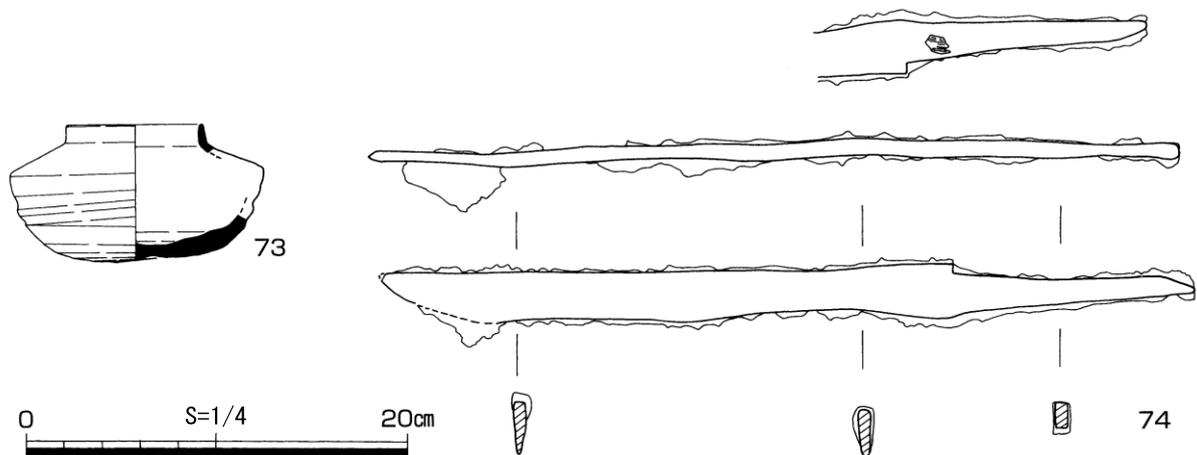
東西の土層③（淡茶灰色砂混じり粘質土）、土層④灰茶色砂混じり粘質土は流土で、蓋石が流失した後に堆積したものとする。

（3）遺物について

遺物は第1面上面の北東隅で須恵器短頸壺1点（73）、西側側壁際中央で刀子1点（74）が出土した。須恵器短頸壺（73）は底部が平丸底を呈し、体部は内湾しながら延び、肩部に明瞭な稜を持つ。頸部は直線的に上方に約1.0 cm延び、そのまま丸く終わらせる。底部外面にはヘラケズリが、肩部稜から下位に3条の凹線が施されている。刀子（74）は鉄製で、かなり錆が進行しているが、錆落とし及びX線撮影で形状が確認できた。全長21.4 cmで、刃部が15.0 cm、柄部が6.4 cm、



第12図 神野1号箱式石棺墓壙完掘状況平面図



第13図 神野1号箱式石棺出土遺物実測図

厚さ 0.03 cmを測る。刃部の刃部分はマチに近い部分がかかなり磨耗し、やや窪んでいる。先端から 3.0 cm部分が切先となる。刃部と柄部分の境には背側に明瞭な段差（マチ）を持ち、刃側は三角形にするのみで、段差を持たない。柄部分はマチを境に徐々に細くなり、断面 0.03×0.07 cmの長方形を呈し、端部は背側を斜めに削り、先端を尖らせる。柄部分には僅かに木質が残っていることが確認できる。

時期は須恵器短頸壺からTK43～TK209型式期（6世紀後半～7世紀前半）で、神野古墳より後出するものと考えられる。

（4）まとめ

第1号箱式石棺の構築順序は、満濃池北東側に延びる丘陵状台地から南西方向に延びる小丘陵の傾斜面の地山を水平に整地し、等高線に併行するように長方形の土壌を掘削する。その土壌の底面に側石として設置する石材の上端が水平になるように、石材下面形に合わせ設置壙を掘削する。側石の設置順序は側壁端部と小口端部の接する面を詳細に検討し推定すると、まず南小口の石材を裏込め石を入れて安定させ設置する。次に西側側壁を南小口の内面西側端部に接するように、直列状に4石を設置し、北小口を西側側壁内面端部に接するように設置する。最後に東側側壁を北・南小口の内面端部に接するように石材を南側から入れ込んでいったもので、最終が北側となり、大小の石材でその間を調整した結果、この部分だけ側壁の直列状の設置が不可能であったものとする。石棺の側石を構築した後、裏込め土、内面整地土、第2面、第1面の順で構築したと考える。蓋石は不明であるが、周囲に40.0～70.0 cm程度の安山岩の角礫が散乱していることから、被覆土が流失し、蓋石も転落したものと考えられる。ただし第1面と側石天井部までが約10.0 cmと浅いことから、現存する側石の上部に更に石材を積み上げていた可能性も考えられる。

県内で箱式石棺が古墳時代後期まで残っていることはなく、古墳時代中期で消滅していることから、今後古墳時代の埋葬方法に一石を投じることとなるだろう。

第6節 神野2号箱式石棺

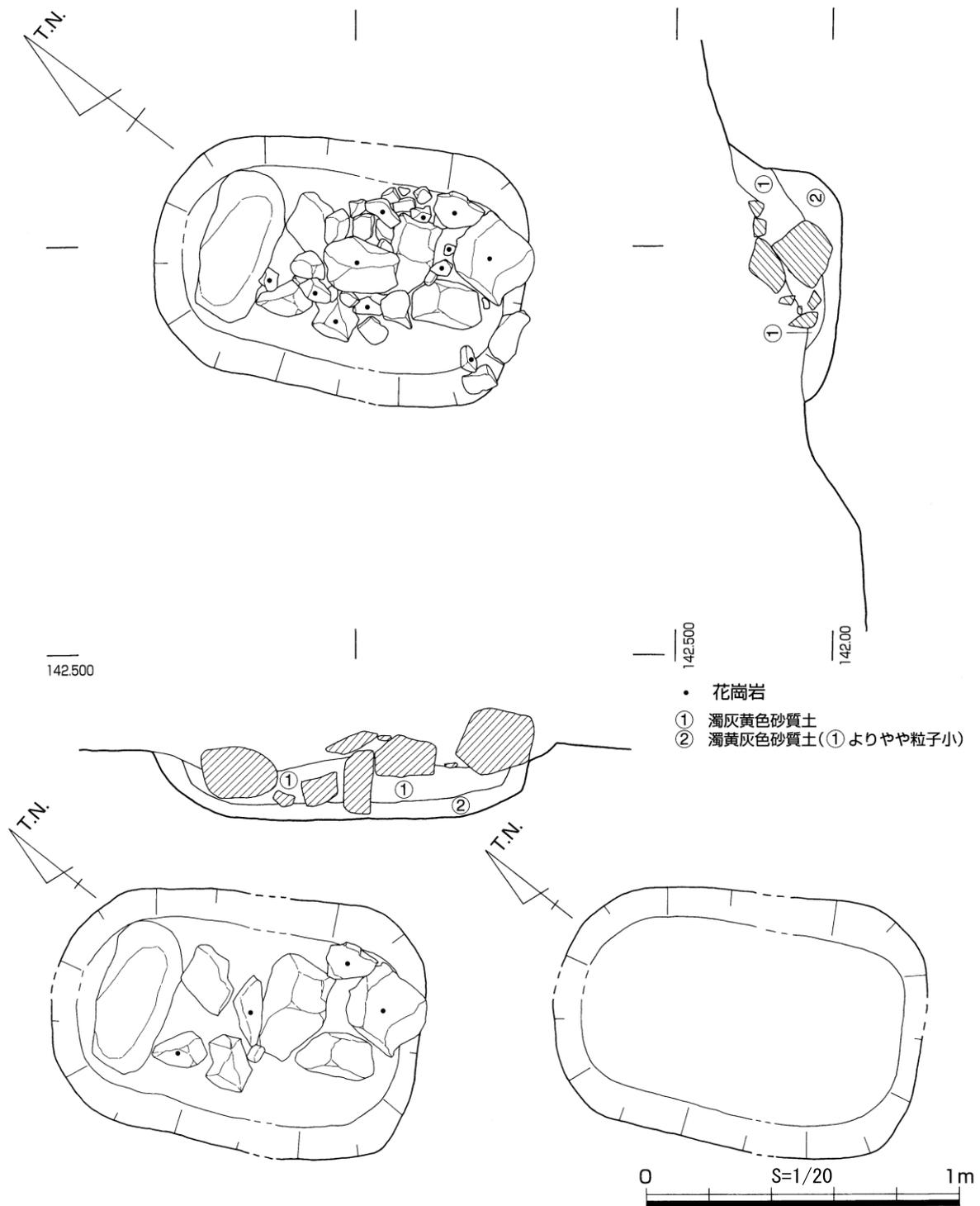
（1）はじめに

神野2号石棺は満濃池の北東岸側で、神野1号石棺から谷部奥側に約20.0m地点において確認した石棺である。満濃池内の分布調査を行った際、土壌状の窪みと窪み内に密集した石材を確認した。石棺は満濃池の汀線付近に所在するため崩壊が進み、現状保存が困難であったことから記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

調査は現況図面を作成した後、堆積状況を確認しつつ遺構埋土の掘削を行った。調査の結果楕円形の土壌とその内部に設置された石材を確認した。

（2）遺構について

調査により確認した土壌は長軸約1.28m、短軸約0.66mの楕円形の平面形を呈する。土壌長軸は地形の傾斜に併行しており、土壌底面の標高は約141.7mで土壌山側の掘り方上場からの深さは約0.36mを測る。土壌の底面はほぼ平坦で、側壁は緩やかに立ち上がった後直線的に立ち上が



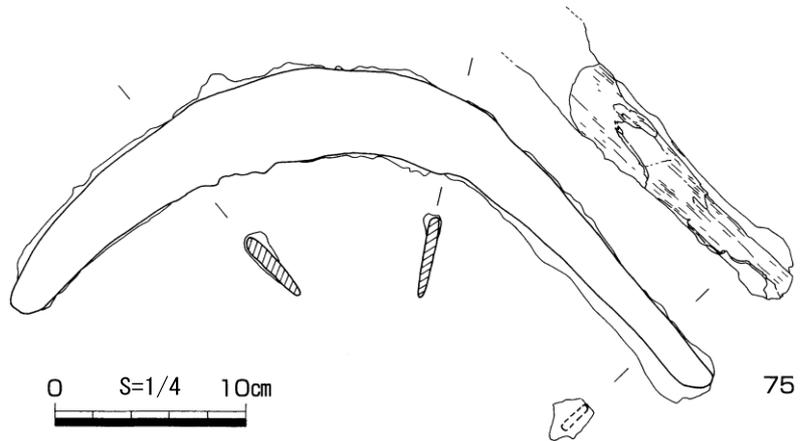
第14図 神野2号箱式石棺検出状況平・断面図、石材検出状況図、土壌完掘状況平面図

る。土壌の埋土は第①層濁灰黄色砂質土、第②層濁黄灰色砂質土の上下2層に分層でき、第②層埋土中より中世に確認される型式の曲刃鎌が出土した。

土壌内部で確認した石材は安山岩と砂岩で、直径約5～10cmの小振りな一群と直径約20～40cmの大振りな一群があった。小振りな石材は流土上層に存在し、規則性は確認できなかった。大振りな石材は直径40cm程度の砂岩が土壌の短辺に併行している他、不定形な板状の石材が直線状に並ぶ箇所があった。長軸の主軸は、N-29.5°-Wをとる。

(3) 遺物について

第①層中より須恵器小片1点、第②層中より鉄鎌(75)が出土している。75は土壙埋土中より出土した鉄鎌である。刃部と明瞭に分離された茎部を持つ有茎鎌で全体が完存している。全長は18.5cm、幅は中央部で2.2cm、刃部の断面はV字形で茎部には木質の痕



第15図 神野2号箱式石棺出土遺物実測図

跡が残る。香川県歴史博物館のご協力によりX線透過写真を撮影した結果、目釘穴や茎部の折り返し等の着柄方法を示す痕跡は確認できなかった。また、木質の痕跡に包まれる部分は幅がせまく厚さも刃部に比べて薄くなっている。有茎鎌は中世以降に出現する資料であるため、後世の混入の可能性が高い。

土壙内の地山に接する下層から中世の遺物が出土したことは、この遺構が古墳時代のものであるのか、また土壙内から検出した石材の配列がランダムであることから箱式石棺であるのかという疑問が残るが、ここでは箱式石棺の可能性のあるものとして報告した。

第7節 神野3号箱式石棺

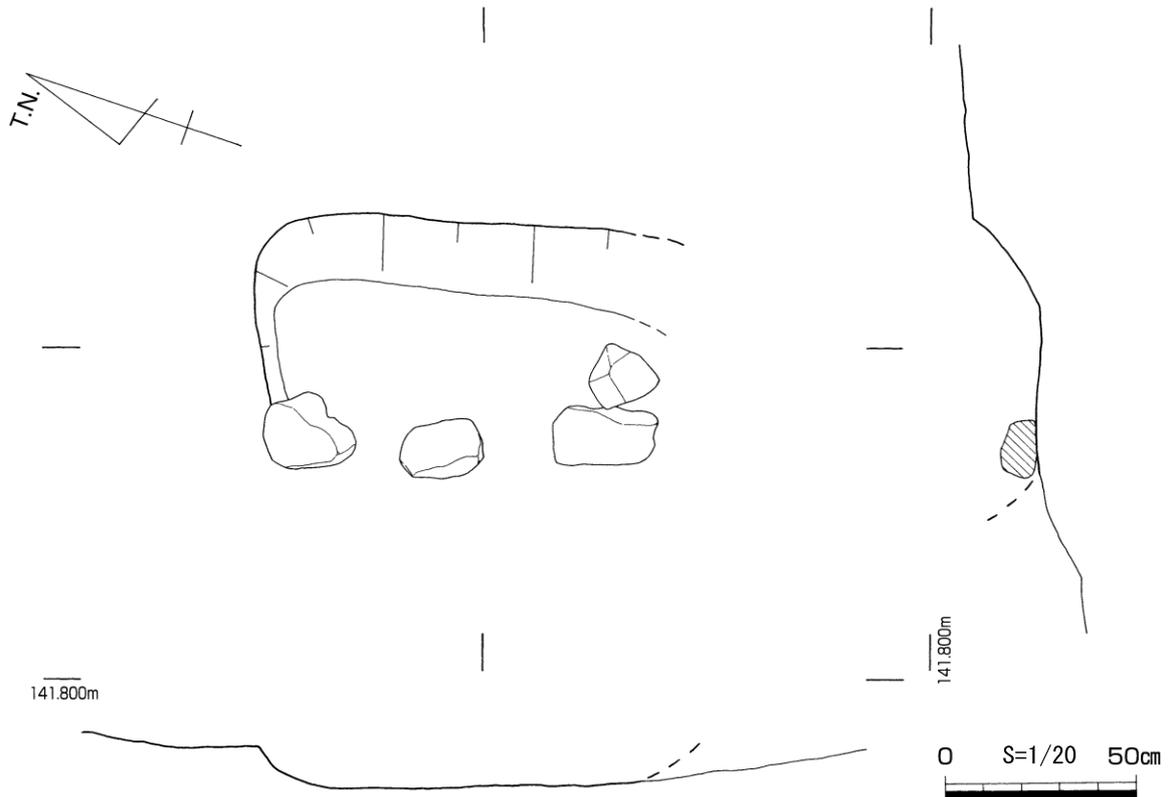
(1) はじめに

神野3号石棺は満濃池の北東岸において確認した石棺である。満濃池周辺の分布調査を行った際、土壙状の窪みと窪み内の石列を確認した。石棺は満濃池の汀線付近に所在するため崩壊が進み、現状保存が困難であったことから記録保存を目的とした発掘調査を実施した。調査は現況図面を作成した後、堆積状況を確認しつつ遺構埋土の掘削を行った。調査の結果楕円形の土壙とその内部に設置された石列を確認した。

(2) 遺構について

発掘調査により確認した土壙は現存長で長辺約1.0m、短辺約0.5mである。2号箱式石棺に比べて満濃池に近いいため崩壊が激しいが、平坦な土壙底面と石列の範囲を見る限り2号石棺とほぼ同規模の土壙であったと思われる。土壙の角度は方位に沿わず地形の傾斜に併行しており、土壙底面の標高は約141.5mで土壙山側の掘り方上場からの深さは約16cmであった。土壙の底面はほぼ平坦で、側壁は緩やかに立ち上がった後直線的に立ち上がる。土壙の埋土は流失していた。

土壙内部で確認した石列はすべて砂岩であり、直径約15~25cmの大きさであった。石列は土壙床面に設置されていたため、原位置を留めたものと思われる。石列の3石は石の外側の面をそろえていた。長軸の主軸は、N-20°-Wをとる。



第16図 神野3号箱式石棺検出状況平面図

(3) 遺物について

遺物は確認できなかった。

第8節 まとめ

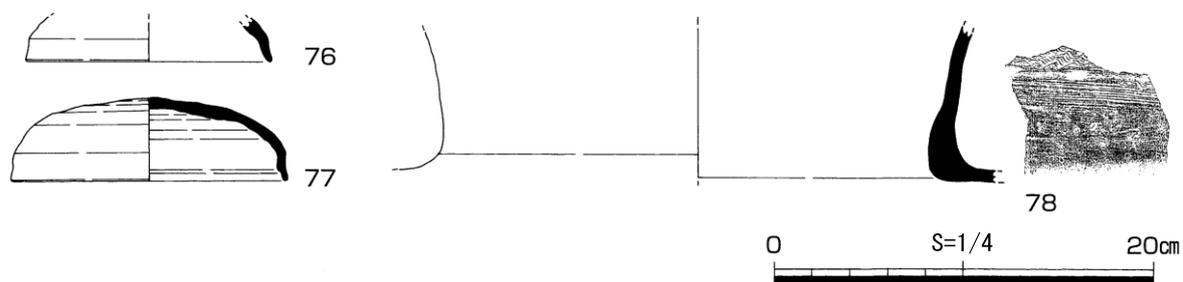
神野1～3号箱式石棺については、全て斜面の等高線に沿って併行しており、検出位置も約20.0m範囲内に位置することから、同じ性格の遺構として同時期に築造されたものと考えられるが、石棺側石の構築方法に差があり、断定はできない。また、第2・3号箱式石棺については、古墳時代の箱式石棺であるのか、それとも別の土壌なのかという疑問も残り、結論の出ないままの報告となっている。

第9節 周辺表採遺物

神野古墳、神野1～3号箱式石棺周辺から遺物を採集した。76は須恵器坏蓋で、口径12.8cmと小振りのもので、天井部から緩やかに屈曲し、口縁部となる。口縁端部はやや外開き気味で、端部は丸く終わらせる。時期はTK217型式（7世紀前半）併行期である。77は須恵器坏蓋で、天井部から緩やかに屈曲し、下方に真っ直ぐ延びる口縁となり、口縁端部内面には段を持つ。時期はTK10型式（6世紀中葉）併行期である。78は須恵器甕の頸部で、やや外反しながら外上方に延びる。頸部外面には波状文が施されている。

以上の遺物は神野古墳、神野1～3号箱式石棺とほぼ同時期で、これらに供伴したものか、別

に遺構があったかは不明であるが、このあたりに6世紀中葉～7世紀前半に古墳群が形成されていたことを示唆する遺物である。



第17図 神野1～3号箱式石棺周辺採集遺物実測図

参考文献

- 1975 『満濃町史』 満濃町
- 2005 『新修 満濃町誌』 満濃町
- 2003 近兼和雄 『満濃町文化財保護協会報』 第34号
- 1983 松本敏三 「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ」 『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要 第2号』 瀬戸内海歴史民俗資料館
- 1993 松井和幸 「鉄鎌について」 『考古論集—潮見 浩先生退官記念論文集』 潮見 浩先生退官記念事業会

第4章 神野1号窯跡

第1節 はじめに

神野1号窯跡は、満濃町史（満濃町 1975、2005）によると満濃池の北側、蛇谷の東の付近に須恵器の窯跡があり、池内斜面部に須恵器の破片が散乱していることや須恵器の窯跡と考えられる部分の写真も記載されている。また、香川県教育委員会によって昭和57・58年に実施された香川県古代窯業遺跡分布調査の報告書（1983 松本敏三）では、窯跡の調査は行われていないものの、須恵器片・窯壁片が散布していることから須恵器窯の存在を明らかにし、報告書内では窯跡を「満濃池東岸窯」と称している。その報告書によると「窯跡のある地点は、領家花崗岩を基盤とし、その上部に三豊層、さらに洪積世堆積物が被される台地地形」で、窯跡の推定位置は須恵器片・窯壁片の散布状況から「旧金倉川右岸の傾斜面、満濃池堰堤から約1km遡上した地点に立地」とし、「ちょうど満濃池の北東にある高屋原の丘陵状台地の平坦面より約40m低い傾斜地にあたる」と推定している。また、報告書内では採集資料として須恵器蓋・坏・甗・硯・甕などを提示し、時期はⅢ期後半（7世紀末～8世紀初頭）としている。

まんのう町教育委員会は今回の調査前に須恵器片・窯壁片の散布する地点を詳細に確認した結果、遺物が散布する範囲の東岸汀線の断面に赤変部分と炭化物層を確認したことから、窯跡の存在を明らかにした。

今回報告する神野1号窯跡は、この「満濃池東岸窯」と位置的にも報告書掲載の内容的にも同一の窯であることが解り、発掘調査後の周知の埋蔵文化財包蔵地の登録に伴い、遺跡の名称を「満濃池東岸窯」から「神野1号窯跡」に変更した。

第2節 調査の経緯・経過

この神野1号窯跡は満濃池の北東岸、汀線際にあることから侵食によって、近年旧状からかなり変化しつつあることや平成19年度から開始される国営まんのう公園による満濃池の北東側にある町道の整備に対応するために、急遽窯跡の範囲の確認と侵食に対する窯跡保護及び保存を目的として、まんのう町教育委員会が平成19年2月1日～平成19年2月26日に範囲確認調査を実施した。

調査範囲は汀線際で、町道より約1m低い平地の部分の約6㎡については、今後の侵食による遺構の保護及び保存を目的として全面発掘調査を行い、窯跡から左右については幅0.5mのトレンチ調査で排水溝などの付帯施設の有無や別の窯の確認を行った。また、平地からの法面及び町道路肩にかかる部分については、窯跡全長を確定するために幅0.5mのトレンチ調査を実施した。

また、窯跡の発掘調査の終了後に神野1号窯跡周囲と満濃池内の遺跡の所在について、分布調査を平成19年6月1日～平成19年6月3日に実施した。

第3節 立地と歴史的環境

神野1号窯跡がある満濃池は、大宝年間（701～704）に造られる以前、まんのう町神野岡からの長谷川、五毛からの本谷川、江畑からの金倉川・中谷川・東谷川によって開削された谷筋で、丸亀平野南東部の平野部へと開く部分で南部分の丘陵と北部分の丘陵状台地から延びる小丘陵の間隔が狭くなり、ちょうどこの部分を堰き止めることにより、満濃池は造られたものと考えられる。そのため満濃池築造以前の谷筋は、南北の丘陵に囲まれ、盆地状を呈していたものと考えられる。現在の満濃池北東岸側はほぼ真っ直ぐな境界線を持ち、南西岸側は北方向に蜘蛛手状に延びた丘陵により幾重にも入り組んだ境界線（汀線）となる。窯跡が所在する北東岸の境界線が直線的な形状を呈するのは、阿讃山脈から延びる丘陵の先端部に所在する高屋原の丘陵状台地が北西方向に延び、ちょうど満濃池の境界線と概ね合致しているためである。その北東岸のほぼ中央部、満濃池の堤防から約800mの地点に神野1号窯跡は位置する。詳細に見ると北東岸にある極小の谷部の北東側に位置する。現在は満濃池の汀線際であるが、築造以前は丘陵状台地南側の緩やかな傾斜地のほぼ中央部分に位置するものと考えられる。

ところで、この満濃池と神野1号窯跡の前後関係であるが、窯跡の時期は表採遺物から7世紀末～8世紀初頭頃と考えられ、満濃池の築造が大宝年間（701～704）とすれば、概ね築造時期が合致する。このことは推定の域を出ないが、築造にかかわった集団への供膳具供給のため、あるいは満濃池完成時の須恵器等を使用した祭祀行為のためなどが考えられるのではないかと。そうすると丘陵斜面の中腹に位置すること短期間で操業が終了していることの説明が付きやすい。これについては再度述べたい。

満濃池内では町史によると古墳が4基しか確認されていなかったが、今回の満濃池の踏査で弥生時代から中世の散布地が南東側を中心としてかなり確認でき、新たに箱式石棺も確認されるなど、満濃池築造以前からこの谷筋部分には人々の営みがあったことが窺われる。「満濃町史」には「池地北の丘陵からは、弥生式後期の土器の破片が採集され、北の丘陵地帯に続く竜頭・高屋原台地には、今も横穴古墳が残っている。」と記述され、周囲に弥生時代・古墳時代の遺跡があることが確認されている。

弥生時代では満濃池南西岸側の汀線際42箇所まで弥生土器後期の壺・甕などの土器片や石包丁・磨製石斧・石鏃などの石製品を表採し、周囲の丘陵部に弥生時代の遺構があったことを窺わせる。また、5～10cmほどのサヌカイトの原石が散布していることから、石材の原産地が近接し、石製品の石材調達が容易であったことも解る。今回の踏査結果と町史の記述から、満濃池の南北の丘陵地には弥生時代の集落の存在を窺わせる。

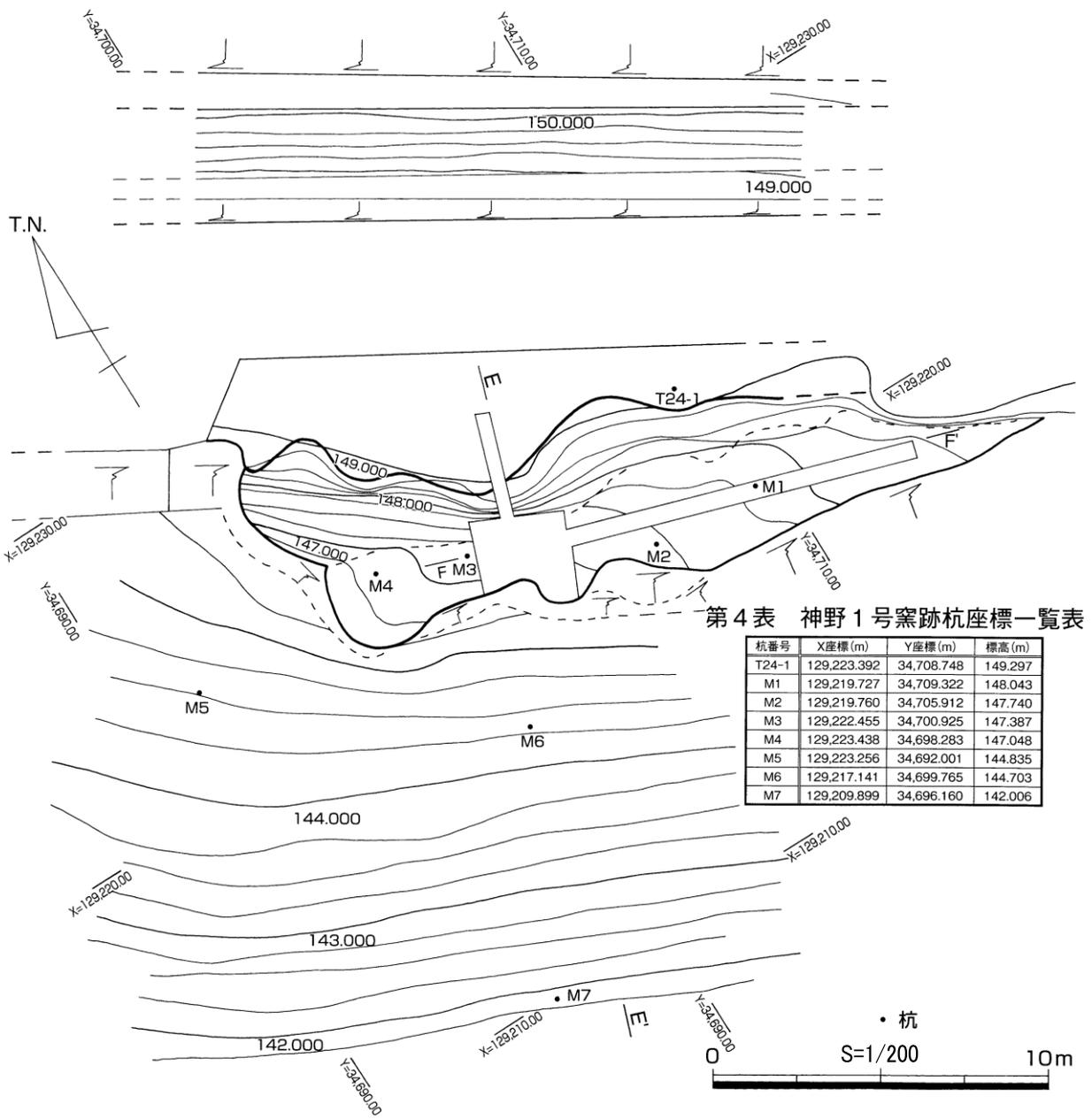
古墳時代では満濃池の北東岸から南西方向に延びる小尾根の先端部に2基の古墳、神野古墳・葦谷古墳（消滅か）があり、南西岸から北方向に延びる丘陵先端部には2基の古墳、長谷古墳（推定）・岡の塚穴古墳（石室構築石材露出）を確認した。これらの古墳の時期は発掘調査が行われていないので詳細は不明であるが、墳丘上の表採遺物から、概ね古墳時代後期（6世紀後半から7世紀前半）のものと考えられる。「満濃町史」では葦谷古墳・長谷古墳・岡の塚穴古墳の記述があ

のみで、今回調査を実施した神野古墳の記述は無い。

古墳を確認した位置は、谷部がやや狭くなる部分の北東岸側と南西岸側にあり、この谷部の最奥部の小丘陵上に立地していることになる。満濃池の堤防方向が閉鎖された状態から、これらの古墳は、この盆地状の谷部に居住した集団か、あるいは金倉川を管理した集団の首長墓と考えられる。

古代では満濃池南西岸側の汀線際で8～9世紀頃の須恵器を多量に採集した。特に㊸地点では現満濃池内斜面部に炭化物の堆積を幅約5.0m、厚さ約0.2mで確認しており、竪穴住居跡あるいは灰原の可能性が考えられる。

古代後半から中世では満濃池南西岸側の汀線際で11世紀～16世紀頃の土師器・須恵器を多量に表採した。この採集された遺物の時期は、「矢原家家記」(讃岐のため池史 2000)によると満濃



第18図 神野1号窯跡地形測量図

池は元暦元（1184）年に堤防が決壊し、江戸時代寛永5～8（1628～1631）年に西島八兵衛によって再築されるまでは荒廃していたと考えられ、この間に池内には人が住み、「池内村」となるとされている。

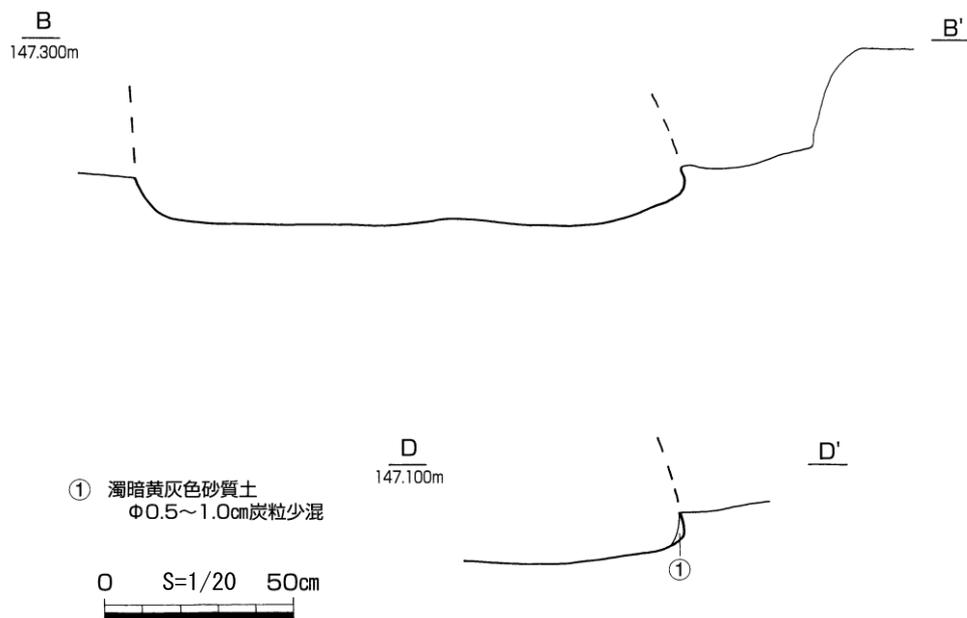
近世以降は高松藩によって底樋の伏替、堅樋又は櫓の仕替が度々行われ、幕末に底樋を木製から石造りとし、明治以降第1～3次の嵩上げを行い現在に至っている。

第4節 遺構について

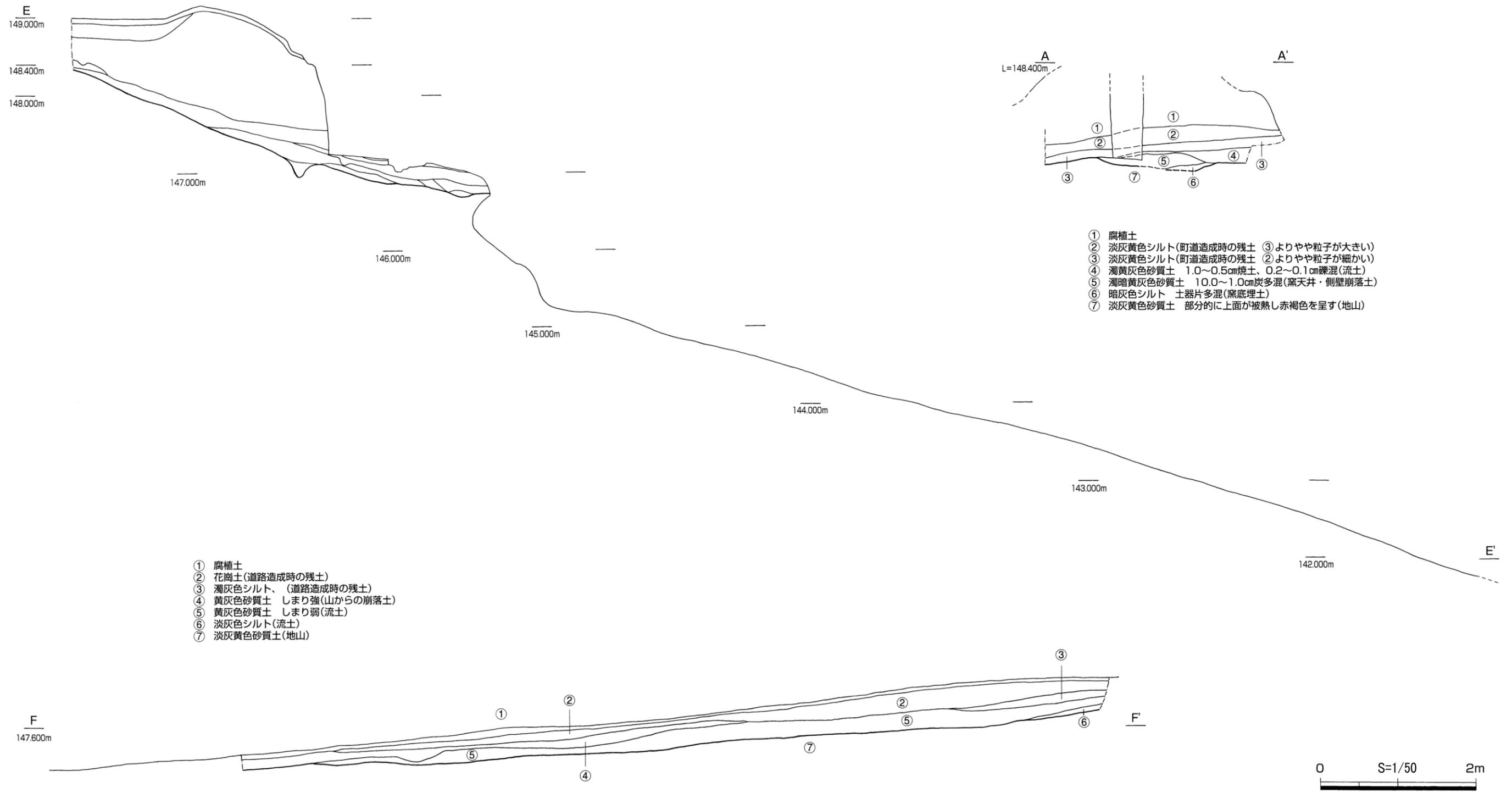
調査区は満濃池汀線際の断面で確認した赤変部分と炭化物層部分の上部で、町道から一段低い平地部分及び町道と平地部分の法面と町道路肩部分の一部が対象となる。調査区は町道より高低差約1.7mの一段低い平地部分に幅約2.8m、最大長約2.9mで、南側を満濃池の境界線に合わせた結果、平面的には歪な台形状を呈し、調査区面積は約6㎡を測る。また、排水溝などの付帯施設や別の窯の有無を確認するため、この調査区部分から左右に幅約0.5mのトレンチを右方向（東方向）に長さ約12.0m、左方向（西方向）に長さ約0.6m設定した。更に北東方向には窯の全長（長軸）を確認するために、法面及び町道路肩部分にかけて幅約0.5mのトレンチを長さ約3.3m設定した。

調査の中心となる平地部分の調査区では、窯跡を検出した。窯跡は平面的に見ると検出した部分の中央部が狭くなり、北側は長形状を、南側は円形状を呈する。北側と南側の境の狭くなった部分には、両者を区画するように幅0.20～0.31m、長さ約1.21m、深さ約0.03mの溝があり、堆積土は全て黒褐色シルトであった。北側からは床面直上と土層③を中心に多量に土器を検出し、壁面部分は赤変していた。一方南側部分では床面直上に炭化物層（炭層）・焼土を検出し、遺物はほとんど出土していない。この状況から北側部分が焼成室で、南側部分が燃焼室と考えられる。

まず、燃焼室は満濃池によって削平を受けているが、残存部分の平面形態は半円形状を呈して



第19図 神野1号窯跡床～側壁断面図

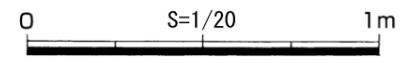


第20図 神野1号窯跡周辺断面図



-  焼土
-  炭の広がり(密)
-  炭の広がり(粗)

- ① 腐植土
- ② 灰色シルト(植物根による攪乱)
- ③ 淡灰黄色シルト(町道造成時の残土)
- ④ 淡黄灰色シルト 5.0~3.0cm炭混(町道造成時の残土)
- ⑤ 灰色シルト 0.3~0.2cm礫多混(流土)
- ⑥ 淡黄色砂質土 淡灰色粗砂多混(流土)
- ⑦ 濁黄灰色砂質土 1.0~0.5cm焼土、0.2~0.1cm礫混(流土)
- ⑧ 暗赤褐色砂質土 6.0~2.0cm焼土少混(窯燃焼部埋土)
- ⑨ 黒褐色シルト 2.0~1.0cm炭多混(溝埋土)
- ⑩ 濁淡灰色シルト 4.0~2.0cm焼土小混(窯燃焼部埋土)
- ⑪ 濁暗黄灰色砂質土 7.0~4.0cm焼土・炭多混、0.2~0.1cm礫混(窯天井・側壁崩落土)
- ⑫ 濁暗黄灰色砂質土 10.0~1.0cm炭多混(窯天井・側壁崩落土)
- ⑬ 暗灰色シルト 土器片多混(窯底埋土)
- ⑭ 灰色粗砂 層上面に2.0~1.0cm焼土(溝埋土)
- ⑮ 淡灰黄色砂質土 部分的に上面が被熱し赤褐色を呈す(地山)





第22図 神野1号窯跡焼土・炭化物検出状況平面図、床面受熱状況平面図

おり、おそらく本来は円形状か、楕円形状を呈するものと考えられる。現存幅は約 1.3m、推定幅は約 1.9mを、現存長は約 1.1mを測る。深さ約 0.06mを測り、東西の断面形態は中央部がほぼ水平で、壁際になるに従い緩やかに立ち上がり端部となる。堆積土は土層⑧暗赤褐色砂質土を中心とし、床面直上全面に炭層が、部分的に赤変した焼土（壁体片か）が堆積する。炭層下、床面全面はほとんど被熱していない。

焼成室は手前部分が狭くなるものの、平面形態が長方形を呈する。規模は幅約 1.45m、深さ約 0.15mを測る。東西断面の形状は中央部が平坦で、端部で緩やかに立ち上がる。部分的にオーバーハング気味に立ち上がる部分があることから、推定断面形状は三角形（おむすび状）を呈していたものと考えられる。床面直上及び土層⑬暗灰色シルトから多量の土器が出土している。出土した土器には須恵質・土師質・焼成不良の瓦質の土器が確認できる。出土遺物焼成に多様な様相が見られることは、おそらく焼成段階で窯が崩壊し、そのまま放置された可能性が考えられる。堆積土は土層⑬上に土層⑫濁暗黄灰色砂質土、土層⑩濁淡灰色シルト、土層⑧暗赤褐色砂質土が堆積し、土層⑬も含め、焼土塊を多量に包含している。この4層が窯の堆積土で、上部の土層⑦濁黄灰色砂質土・⑥淡黄色砂質土は流土と考えられる。

焼成室の長さを確認するため北側に延ばしたトレンチでは、焼成室と燃焼室の境にあった区画溝端部から約 1.65mの部分に、この溝と併行するように幅約 0.46m、深さ約 0.20mで、断面形状が「V」字を呈する溝を検出した。床面は全面が赤変しており、部分的に焼土塊が堆積する。トレンチの長さが町道路肩に限定されていたために焼成室の全長の確認は出来なかったが、トレンチ内で確認した全長は約 4.81mを測る。このトレンチでは、煙道まで検出していない。

床面の傾斜角度は燃焼室がほぼ水平で、焼成室はトレンチ内で検出した溝部分を境にして手前部分が約 12.5°、後部分が約 23.0°を測り、この溝を境として焼成室の床面の傾斜が変わっていることが解る。

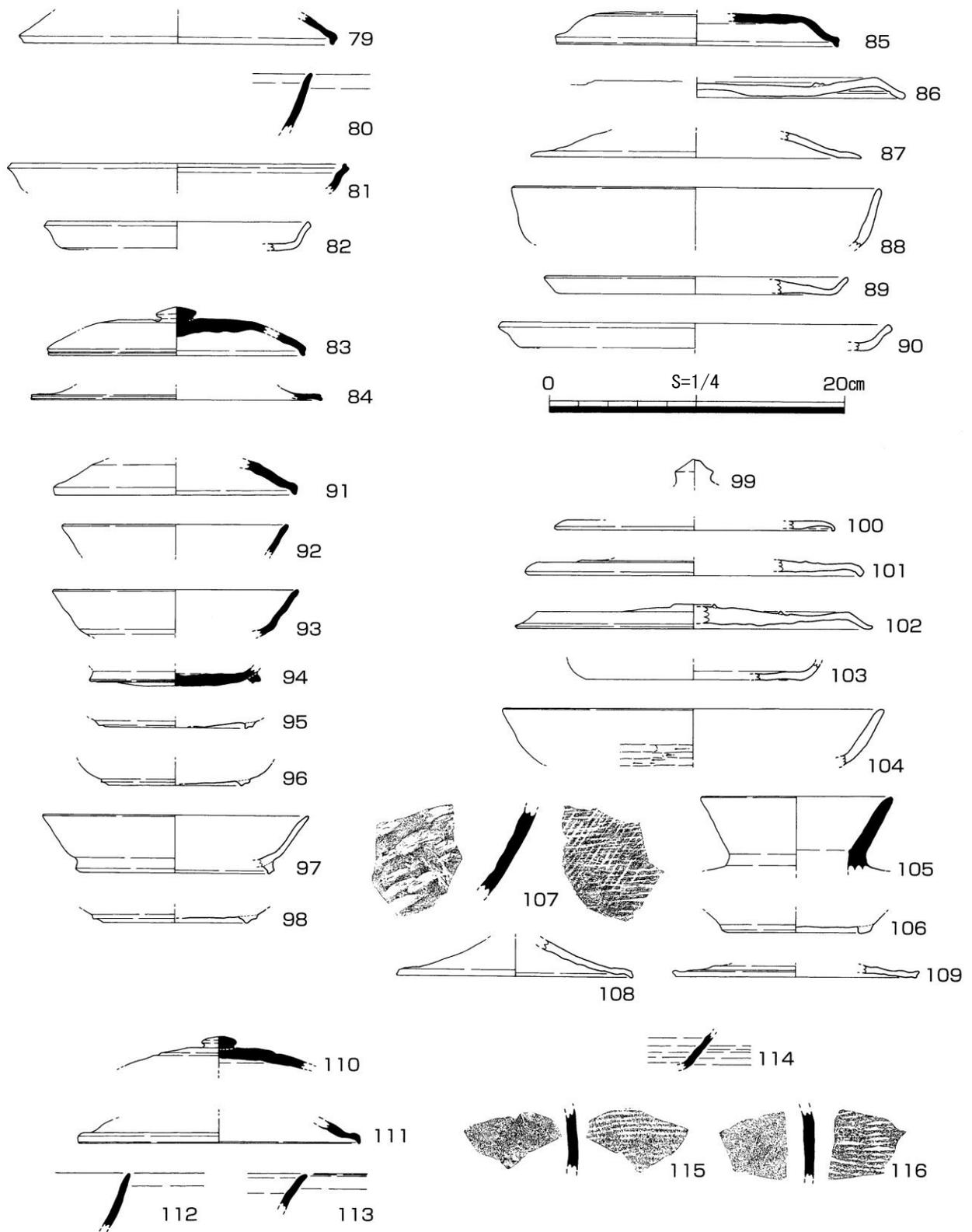
灰原は満濃池の汀線部分が侵食により、約 1.5mの高低差で削られ、確認できなかった。また、池内は約 16°と緩やかに傾斜する。この傾斜角度は窯の焼成室とほぼ同じ傾斜を持っており、旧地形をある程度反映しているものと考えられ、窯は 10°～20°の緩やかな旧地形を利用して造られたと思われる。

第5節 遺物について

遺物は窯跡、特に焼成部前の部分で多量に出土した。その中でも第⑦層、第⑧層、第⑫層、床面直上（第⑫・⑬層）からの出土量が多く、形態の解るものについて図化した。

79～82は第⑦層、83・84は第⑧層、85～90は第⑫層、91～109は床面直上（第⑫・⑬層）から出土した遺物である。これらの土層中から焼土壁や炭が多量に出土していることから、焼成段階で窯が崩壊したものと考えられ、そのために出土遺物も還元焰焼成された須恵質となっているもの、焼成不良の瓦質となっているもの、まだ土師質の段階のものと同様である。

第⑦層出土遺物の 79～81は須恵質で、82は土師質である。79は坏蓋で、直線的な天井部から



第23図 神野1号窯跡出土遺物実測図

口縁部を下方に屈曲させる。かなり天井高（器高）が高くなるものと考えられる。80は坏身（高台付き）で、体部はやや内湾するがほぼ直線的に外上方に延び、口縁端部外面を横ナデすることにより若干窪ませる。81は皿で内湾する体部から口縁部を外反させ、端部を上方に摘み上げる。器高は2cm程度で、口径が22.6cmとかなり大型のものである。82は皿で、器形的には81と同形態を呈するが、体部から口縁部の屈曲が弱く、口径も17.6cmと若干小型である。

第⑧層出土遺物の83・84は、焼成が土師質である。83は坏蓋で、ほぼ平らな天井部の中央にやや扁平なつまみが付く。天井部から口縁部にかけて直線的に延び、口縁部は下方に屈曲させる。天井高（器高）は推定で、約3.2cmと高い。天井部外面にはヘラケズリが顕著に認められる。84は高坏脚で、スカート状に広がる脚軸部からほぼ水平に延び、端部に至る。端部は下方に若干摘み出し、外面に1条の沈線を持つ。

第⑫層出土遺物の85は須恵質で、86～90は土師質である。85は坏蓋で、水平な天井部から下方に屈曲し、口縁端部となる。口縁部は水平に屈曲させ、端部は下方に短く屈曲させる。天井部はヘラケズリの後、指ナデが施されている。86は皿の蓋で、ほぼ水平な天井部から下方に「く」の字に屈曲し、口縁端部となる。天井部外面の外側1/3付近に高台状の低い突帯を持つ。87は蓋と考えられ、天井部から口縁部がほぼ水平に延びる。高坏の脚の可能性もあるが、ここでは蓋とした。88は坏で、体部が直線的に外上方に延び、口縁端部はそのまま丸く終わらせる。89は皿で、底部から体部が「く」の字に屈曲し、体部は直線的に外上方に短く延びる。90は皿で、体部が直線的に外上方に延び、端部は方形状に終わらせる。

床面直上出土遺物の91～93・96・97・105～107は須恵質で、94・95・98～104・107・109は土師質で、97・98・105～107が瓦質である。91は坏蓋で、直線的な天井部から口縁部を下方に屈曲させる。かなり天井高（器高）が高くなるものと考えられる。92～98は高台付き坏身で、体部は直線的に外上方に延び、端部はそのまま丸く終わらせる。体部下半は丸みを持ち、底部となる。その丸みを持った体部から底部となる部分に外方に踏ん張る高台が付く。高台は長さが3～6mm、接地面に窪みを持つもの、持たないものと様々あるが、底部から緩やかに丸く、体部に至る部分で、外方に踏ん張るように高台が付いていることは共通している。94は高台より底部が丸く突出するもので、底部外面にヘラケズリが顕著に認められる。99～102は皿の蓋である。99は宝珠形を呈したつまみである。100はほぼ水平な天井部から緩やかに下方に屈曲し、口縁端部となる形態で、口縁端部は丸く終わらせる。101はほぼ水平な天井部から下方に屈曲し、口縁端部となる形態で、端部は三角形を呈する。天井部外面の外側1/3付近に高台状の低い突帯を持つ。102はほぼ水平な天井部から下方に「く」の字に屈曲し、口縁端部となる形態で、口縁端部はさらに外方に短く屈曲させる。天井部外面のほぼ中央部と内側に断面三角形の小さい突帯を持つ。103は皿の身である。ほぼ水平な底部から体部へと屈曲させ、体部は内湾しながら外上方へ延びる。104は坏で、体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸く終わらせる。体部外面下半に横方向で、幅5mm程度の手持ちヘラケズリが施されている。105・106は短頸の高台付き壺である。底部に断面方形の高台が付く、体部は上位に最大径がくるものと考えられる。頸部は直線的に外上方

に延び、口縁端部はそのまま丸く終わらせる。107は甕の体部で、外面に併行叩きを斜格子状に、内面に円弧状の当て具痕が認められる。108・109は高坏脚部である。108は緩やかに開く脚部で、口縁端部を下方に屈曲させる。109は脚部が水平に近く開くもので、端部は上方に摘み上げる。

110～116は満濃池内の窯跡周辺、約40mの範囲内で表採した遺物で、全て須恵質である。110・111は坏蓋で、110は緩やかに盛り上がった天井部の中心に扁平なつまみが付く。111は坏蓋の口縁部で、外方に屈曲し、ほぼ水平な口縁部を持ち、端部は下方に屈曲させる。112は坏身（高台付き）で、体部が直線的に外上方に延び、口縁端部はそのまま丸く終わらせる。113は坏身（高台付き）で、体部がやや外反しながら外上方に延び、口縁端部はそのまま丸く終わらせる。114は坏の底部で、底部と体部の境は丸く、体部は直線的に外上方に延びる。115・116は甕の体部で、体部外面には併行叩き痕が施され、内面は指ナデされており、当て具痕は認められない。

出土遺物には高台付き坏蓋・身、皿蓋・身、坏、壺、高坏、甕とかなりバリエーションが認められる。その中で高台付き坏の形態を見ると、坏蓋の器高が高く、坏身の底部から体部へ緩やかに屈曲し、高台がその部分に外方に踏ん張るように付くことから時期はTK48～MT21型式（7世紀末～8世紀初頭）と考えられる。

第6節 まとめ

（1）立地について

神野1号窯跡はまんのう町神野岡からの長谷川、五毛からの本谷川、江畑からの金倉川・中谷川・東谷川によって開削された谷筋で、満濃池の北東岸側のほぼ中央部、満濃池の堤防から約800mに位置する。詳細に見ると北東岸にある極小の谷部の北東側に位置し、現在は満濃池の汀線際であるが、築造以前は丘陵状台地南側の傾斜地のほぼ中央部分で、標高は約147.0mを測る。満濃池が造られる以前の谷底の標高を満濃池の堤の標高（約149.0m）堤高（約32.0m）から推定すると標高約120.0m程度であることが推測でき、窯跡は標高約200.0mの丘陵状台地から約50.0m下位で、底面から約30.0m上位に造られていたことが推測できる。

（2）構造について

検出した部分が、燃焼部の奥側と焼成部の前側の一部で、焼成部の奥側から煙道までは検出していないことから詳細は不明であるが、燃焼部と焼成部が溝によって区画され、また焼成部の前寄りにも溝による区画が認められる。この溝を境として焼成部の傾斜角度は異なり、前側が約12.5°、後側が23.0°となる。近年刊行の小谷窯跡・塚谷古墳（2002）で検出した小谷1号窯・2号窯の焼成室の床面傾斜角度と比較すると、小谷1号窯の1～3次の床面傾斜角度は燃焼部側が16°～22°、奥壁側が35°～40°、小谷2号窯の床面傾斜角度は18°～19°と、小谷1号窯と同様に変換点を境にして傾斜角度が変わるが、神野1号窯の床面傾斜角度は緩やかで、どちらかといえば小谷2号窯に類似する。小谷1号窯は全長7.9mの地下式の窖窯で、小谷2号窯は残存長で3.58m以上であるが、小谷1号窯よりは規模が小さいものと考えられる。このことから神

野 1 号窯跡は小谷 2 号窯と同規模と考えられる。

(3) 時期について

時期は遺物の説明で述べたが、高台付坏の形態で、坏蓋の器高が高いこと、坏身の底部から体部へ緩やかに屈曲し、高台がその部分に外方に踏ん張るように付くことから時期はTK48～MT21 型式（7 世紀末～8 世紀初頭）と考えられる。

(4) 満濃池との関係について

満濃池の築造が「満濃池後碑文」によると大宝年間（701～704）といわれており、この資料を前提とすると前述した神野 1 号窯跡の時期とほぼ同時期に築造されていることとなる。このことは推定の域を出ないが、築造にかかわった集団への食器供給のため、あるいは満濃池完成時の須恵器等を使用した祭祀行為のためなどが考えられるのではないかと考えられる。そうすると丘陵斜面部の中腹に位置すること短期間で操業が終了していることの説明が付きやすい。また、窯跡周辺で汀線際の断面を観察したが、神野 1 号窯以外に窯跡は確認できなかったことやまんのう町内に窯跡が確認されていないことから、特定の目的のために造られた可能性が考えられる。

参考文献

1975 『満濃町史』満濃町

2005 『新修 満濃町誌』満濃町

2003 近兼和雄『満濃町文化財保護協会報』第 34 号

1983 松本敏三「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要 第 2 号』瀬戸内海歴史民俗資料館